かながわ青年期サポートブック　Vol・2

わかもの互立（支えあい）ネットワーク

かながわ青年期サポートブック Vol.2

―　子ども・若者からのメッセージ　―

発行　わかもの互立（支えあい）ネットワーク

本冊子は、リコー社会貢献クラブ Free Will の助成により発行しています

― 目　次 ―

はじめに　ヒアリングまでの活動経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

1．若者の声

1 母子家庭で生活保護受給、
高卒後に自活を目指すＡさん（女性・19 歳）・・・・・・・・・・・・・ 3

2 不登校、大卒後に就活が上手くいかず
就労支援を利用したＢさん（女性・26 歳）・・・・・・・・・・・・・・ 7

3 ひきこもりから
フリースペースを利用したＣさん（女性・35 歳）・・・・・・・・ 11

4 親の蒸発を経験、
自立援助ホームを利用したＤさん（男性・24 歳）・・・・・・・・ 17

5 乳児院、児童養護施設、
自立援助ホームを利用したＥさん（男性・21 歳）・・・・・・・・ 22

6 虐待により高校中退を余儀なくされ、
自立援助ホームを利用したＦさん（女性・20 歳）・・・・・・・・ 26

7 親からの暴力を周囲に気づいてもらえ、
自立援助ホームを利用したＧさん（女性・21 歳）・・・・・・・ 32

8 不登校、高校中退、緊急一時シェルターから
母子生活支援施設につながったＨさん（女性・19 歳）・・・・ 36

9 自立援助ホームを経験、自活に向けて
母子生活支援施設を利用するＩさん（女性・23 歳）・・・・・・ 41

10 児童養護施設・里親を経験、退所者の居場所作りに
取り組む夫のＪさん（26 歳）と、母子家庭で高校中退して
働いてきた妻のＫさん（26 歳）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

※年齢はヒアリングを実施した平成 26 年度現在

2．座談会　～ヒアリングから思うこと～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

3．サポートブックからの提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
◆コラム　― ボランティア養成への試み ―

4．特別寄稿　沖縄大学名誉教授　加藤彰彦氏 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

おわりに　― 謝辞 ― ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

参考資料　若者へのヒアリング企画書 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

本冊子はリコー社会貢献クラブ FreeWill の助成により発行しています。お礼申し上げます。

発　　行　2016 年３月
発 行 者　わかもの互立（支えあい）ネットワーク
共同編集　社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
デザイン・印刷　特定非営利活動法人共働あるむ
障害福祉サービス事業所あるむ
イラスト　阿部清治

本冊子へのお問合せは、
神奈川県社会福祉協議会 企画調整・情報提供担当まで
TEL 045-311-1423　　FAX 045-312-6302
E-mail　kikaku@knsyk.jp

―本冊子は、県社協ホームページからダウンロードできます―

神奈川県社協	検索

http://knsyk.jp/

はじめに
ヒアリングまでの活動経過

【自立に困難さを抱えた子ども・若者たち】

▣ 10 代後半から 20 代の子ども・若者が自立の困難さを抱えています。

▣多くの子どもたちは、高校卒業後に進学や就職など、自立に向けて少しずつ歩んでいき、家庭や学校、地域社会等の協力を得て、見守られながら生活をしています。

▣しかし一方で、貧困や虐待・暴力といった家庭環境の課題、発達障害や精神疾患などがあって、不登校・ひきこもりとなったり、対人関係や社会生活がうまくいかず、思うように就学できない、働くことができない、場合によっては住む場所すらないなど、生活に困難を抱える若者が増えているように思います。同様に、児童福祉施設や里親の元から巣立っていく方たちも、多くの苦悩を抱えて生活していることが懸念されます。

【若者支援のネットワーク設立、青年期サポートブックの発行】

▣（福）神奈川県社会福祉協議会（以下、「県社協」）は、今日的な福祉課題への政策提言をまとめるにあたり、平成 23 年度に県社協会員に向けて行った課題把握調査にて、こうした子ども・若者への支援の必要性を把握したことからシンポジウムを開催。県社協による支援を受けて、平成 24 年度にはシンポジウム参加者が主体となって、支援機関同士の連携を進めることを目的とした学習会を開催し、任意団体「わかもの互立（支えあい）ネットワーク」（以下、「互立ネット」）へと発展しました。

▣互立ネットは、関係機関同士がお互いに顔の見える関係作りと社会資源の共有化が改めて課題と認識し、平成 25 年度に県社協と協働で、若者支援に関する事例や県内の社会資源をまとめた「かながわ青年期サポートブック」（以下、「Vol.1」）（※）を発行し、関係機関・団体の約 800 カ所に配布をしました。

（※）「かながわ青年期サポートブック」（平成 25 年 2 月発行）は、神奈川県社会福祉協議会ホームページに掲載しています。http://www.knsyk.jp/

【若者へのヒアリング－若者たちの生の声を聴く】

▣ Vol.1 では、今後の若者支援の方策として、自立に困難さを抱えた若者たちに身近な立場で寄り添う見守りボランティアの養成、学びの保障、職親さんの拡充など、必要に応じた「育ち」を支える仕組みづくり等を提案するなど、子ども・若者へのサポート体制の充実を目指してきました。

▣一方で、これまでの議論は、支援者側の議論であるとも言えます。そこで、若者から直接、「声を聴く」ということが大切ではないかということに気づかされました。

▣そこで私たち自身が若者たちの抱える生きづらさ、生きにくさに改めて向き合うため、平成 26 年度は 18 歳を過ぎた今も継続して支援機関と関わりのある若者から「いま抱えている気持ち」や「これからの希望」についてのヒアリングに取り組み、生育歴や家庭環境、暮らしぶりはそれぞれに異なるも、何かしらのサポートにつながった当事者の声 10 組 11 名の「生の声」が集まりました。

▣ 11 名の若者たちは、今もなお辛い中にいる子ども・若者たちの助けに少しでもなってほしいという思いから正直な気持ちを告白してくれました。この声は、日頃の私たちの姿勢を見つめ直すことだけにとどまらず、社会への疑問まで伝えてくれる多くの示唆に富んだものとなりました。この若者たちの声を、それぞれの方が受け止めてくださり、これからのサポートへの一助となれば幸いです。

わかもの互立（支えあい）ネットワークの名称となった「互立」の由来

さまざまな困難を抱えた若者に、支援者や関係者・市民が途切れることなく寄り添い、お互いに支えあい、成長しあうためのあり方・関係性を意識するため、「互立（ごりつ）」（interdependence; 京都府立大学教授津崎哲雄氏訳）という言葉を、ネットワークの名称に選びました。

1．若 者 の 声

1　母子家庭で生活保護受給、高卒後に自活を目指すＡさん（女性・19 歳）

母子家庭で、生活保護を利用してきた。普通高校を卒業後、アルバイトでアパレル、雑貨関係の仕事を行う。卒業後も高校教員が相談に乗り、自立に向けて寄り添っている。

キーワード

◎　母子家庭の中で育って
◎　高校のこと
◎　２年生の時に遅刻しがちになった
◎　仕事のこと
◎　色々抱えているから、相談しても何が分かるんだろうと思う
◎　相談できるところを頼りたくない。
　　辛いですって表に出すことが嫌
◎　経済的に余裕を持ちたい

＜母子家庭の中で育って＞

人に話しかけるのは得意かなって思う。勉強とかは、全部苦手だけど。人のことをすごい見て気を使います。小さい時からしょっちゅうです。時々我慢して、発散する日もある。

高校のときに学校でよく怒ったり、泣いたりしていました。友達は多い方で、自分から声をかけてたかなって思います。家族は母、妹との三人暮らし。近くに、おじいちゃん、おばあちゃんが住んでいます。お父さんのことは知っているけど、気づいたらいませんでした。小さい頃、お父さんと元々一緒に住んでいなかったけど、たまに帰ってくる。でも、帰って来ない時の方が多いから、いないのと一緒でした。いつしか、ずっと帰って来なくなりました。母はパートで家計的に大変だったけど、歩いて行ける距離におばあちゃんとおじいちゃんが飲食

店をやっていたので、ご飯食べに行ったりして今でも助けてもらっています。

＜高校のこと＞

高校入ってみて最初嫌だなって思いました。学校のイメージも悪かったし、生徒の常識が無いイメージがすごく多かった。でも、慣れて行くにつれ自由な感じに自分もできるし、学校が早く終わることが多かったから、この高校で良かったって思いました。

先生は、他の高校よりも苦労してると思う。当たり前だけど、生徒のこと見きれてない先生もたくさんいるから、自分の思うままに意見を言う人が多い。先生の中でも見てる人はいるけど、見ていない人は見ないと思っていました。

アパレルの仕事したいって思ってて、高校卒業してだと知識が全くないから、大学で学んでからやりたいって思っていて、でも今は大学に行かなくて良かったって思っています。周りで大学行って、大学つまんないって辞めている子もいるし、逆に就職して、仕事は辛いけど続けていけてるって子の方が多いから。

＜２年生の時に遅刻しがちになった＞

遅刻が多くなったのは、クラスがつまらないことが理由。クラス替えがあってグループができていて、楽しいけどつまらないみたいな感じです。クラスの人が嫌いとか嫌だってわけじゃなくて、1年生の時に一緒にいた人達が2年生になってもお昼とか一緒にいるじゃないですか。でも、私はいろんな人としゃべりたいから、そのグループだけじゃなくて、クラス替えしたら初めて会った子とかとも仲良くしたいから、お昼もクラスの子と食べたりしていました。だけど、1年生の時に一緒にいた子は、そういうことが嫌で、私たちと一緒にいたくないの？というのがありました。私は面倒くさいな、色々な人と仲良くしたいって気持ちでした。

高校はグループが出来ちゃって、ずっとグループと一緒にいる子が多かった。私みたいに色々な人に話かけたりするのも嫌だったと思う。

＜仕事のこと＞

高校のときはファミリーレストランでアルバイト、今は、アクセサリー販売です。

就職活動しようと思って辞めたんですけど、正社員の一歩が踏み出せなくて、働いてない期間があるのはマズイと思って、フリーターでもお金を稼げるだけ稼ごうと思って子ども服のお店で働いて、その後辞めて今の仕事をしています。

人と話すことは好きだけど、接客は好きじゃないなって思います。その仕事選んでいるわけだから全力でやりますが。今働いているお店では、お客さんの方から話しかけてくることが多いです。店長に、面接の時に、接客を積極的にするのは私は向かないのかも知れないっていうのを言って、お客さんに物を売りつける感じとかも嫌でっていう話をしたら、その店長が、僕もそういうのが嫌だからなんか分かるっていうのを言ってくれたのが良かったです。

＜色々抱えてるから、相談しても何が分かるんだろうと思う＞

サポートしてくれる人が欲しい気持ちはないですね。軽い感じのことはなんでも話せる人がいたとしても、私が色々と抱えてるから話しきれない部分もあるし、人を信じられない部分もあるから。相談のるよって言ってくれる人がいたら、話はするけどそこまで頼りにしないかもしれない。

いたとしても、やっぱりその人に言ったとしても何が分かるんだろうって思っちゃう。友達とかもそうだし、自分とは違う生き方をしてる人がいて、その人がすごいいい子だったとしても、やっぱりその経験は、した人にしか分からないから、誰に言っても分からないと思うし、サポーターがいたとしても、多分、鬱陶しくなっちゃうかも。人を信じた時もあるけど人の心は読めないから、相談乗ってくれる人がいるよって言って相談しても、本当に自分を心配してくれるとは限らない。結局、経験してないから分からないって私は思います。

＜相談できるところを頼りたくない。辛いですって表に出すのが嫌＞

身近なことを知ってる人に相談する方が、やっぱりいいって思う。なんとかサポートとか、広告とか出てても絶対手伸ばしたいって思わないし、逆に、怖い。いいところもあるかも知れないけど、そこには頼りたいって思わないかな。そういう所に頼りたくないし、辛い人が集まってるんだったら、自分が辛いですって表に出ちゃってるのは嫌だから。

＜経済的に余裕を持ちたい＞

修学旅行は自分の意思で行かなかったってのあったけど。経済的に大変だったので周りよりはつらい経験したと思う。

これからお金に余裕持てるかなっていうところが不安。家を出なきゃいけないっていうのは初めてで、自分で何でもしていくっていうのも初めて。一人暮らしで頼れる人がいなくなるから、お金とかも、例えば、無ければご飯とか、おじいちゃんとかおばあちゃんとこで食べたりとかできるじゃないですか。近くに住めばできるかも知れないけど。家賃とかやっていかなきゃいけないじゃないですか。大人の人が管理してたのが自分でやらなきゃいけないから、そういうところで不安です。自分にできるかなって。料理の得意な人がいたら教えてもらいたいですね。毛玉のできにくい洗濯の仕方とか知ってる人がいたら聞きたいし、そういうの知ってる人がいたらもちろん頼りたい。

余裕がない家庭だったから、将来は余裕が持てる家庭を築きたい。

支援者からみたコメント

高校時代のＡさんは、家庭環境や経済面の問題を多く抱えていましたが、そのことについて自ら教員に助けを求めるタイプではありませんでした。感情の起伏が激しく、時に友人とのトラブルを生じるＡさんの話をひたすら聴くことが、教員にできるサポートでした。Ａさんだけではなく、自分が辛い思いをしていることを周囲に知られたくないと考え、いわゆる「支援」という響きに拒否感を持つ生徒は少なくありません。それは、自分で問題を解決しようと努力するエネルギーにもなりますが、必要な支援になかなかたどりつけないということでもあります。Ａさんの場合は、全ての生徒が関わる「進路指導」の中で、本人が何に困っているか把握し、個別支援につなげることができました。

「誰にも相談したくない、頼りたくない」と思っているわけではありませんが、「相談機関に行っても何も変わらないかもしれない」「傷つくかもしれない」と不安が強くて、最初から拒否する生徒もいます。しかし、教員が高校生にずっと伴走できるわけではありません。卒業までに、生徒の自尊心を傷つけない自然な形で、卒業後も継続して支援してもらえる機関につなげられればと思います。

2 不登校、大卒後に就活が上手くいかず 就労支援を利用したＢさん（女性・26 歳）

高校を中退後、通信制高校に編入し卒業。大学へ進学し、卒業したが就活がうまくできずに、23 歳から若者サポートステーションを利用し、障害福祉サービスの就労移行支援事業所でジョブトレーニングを受けた。

キーワード

◎　事業所での仕事内容
◎　友だちができたことの嬉しさ
◎　私はお金もないし、家にいづらい
◎　放り出されるのは辛い。親の理解が欲しかった
◎　世の中は恐い
◎　気持ちを分かってくれる人の存在が必要
◎　将来は“社会人”になりたい

＜事業所での仕事内容＞

仕事はしていませんが、就労移行支援事業所に週５日通っています。月・火・木の９時から３時半、水・金の９時から 12 時までです。ビジネスマナー、SST、スーツ着て面接の練習、入退室の仕方などをやっています。その他には、会社の部署を想定した活動をしていて、私は広報部に所属していますが、その日の日直、電話当番、お茶出し当番、ホワイトボードに貼りだすのに使うネームプレートを作ったり、朝礼でのスタッフへのお知らせを文章にしたり、就労移行支援事業所から就職された方へ配信するメールマガジンの記事を書いたりしています。週一回広報部のミーティングがあります。通う日数は徐々に増やしてきて、最近やっと週５日になりました。事業所に通うので体力的に疲れ切ってしまい、休みの日は大体寝ています。

＜友達ができたことの嬉しさ＞

いま嬉しいことといえば、私ずっと友達がいなかったのですが、最近事業所のメンバーと話ができるようになって、たわいのない話をするのが楽しくなってきて嬉しいです。たわいもない話ができるようになったのは最近のことです。通う日数を徐々に増やしていって、事業所の外に実習に行ったり、広報部に入ってから話すようになりました。

広報部ではリーダー格の方が声を掛けてくださって、活動をしている中でその方と話ができるようになってきたのと、職場体験実習で一緒に行った方と少しずつ話すようになりました。

雑談は本当に打ち解けてきて緊張がほぐれてきてから。最初は向こうから話かけてこられたりして、何か面白いこととか言う方がいらしたら笑ったりとか。メンバーさんと一緒に過ごす時間が経つにつれて、就職決まって事業所を去っていく方もいて、寂しくて泣いたりしました。人によりますが、自分からも気軽に話せる人もいます。

＜私はお金もないし、家にいづらい＞

両親と妹の４人で住んでいます。家にいることが嫌です。お金もないですし、家にいづらいです。

母とは一応話せます。関係はどちらかと言えば、良いと言ってもいいんじゃないかと。妹とは仲は悪くはないです。父親とは口をききません。父親の方からも話さないです。父と同じ食卓につくのが苦痛なので同じ食卓についていないです。父側がどうだったか分かりませんけど、私は父を好きにはなれないです。言っていることや振る舞いが。たまにくだらないことでキレて物にあたったりとか。

父親は私のこと好きじゃないと思います。世間なみに自立できてないし、私に対しては無関心だと思います。小さい頃は無関心ってことはなかったですけど。決定的なのは高校の時、学校に行かなくなった時です。不登校に対する理解がなかったです。

＜放り出されるのは辛い。親の理解が欲しかった＞

不登校になったときに、親が私を放り出したいみたいな気持ち、態度だと感じました。親に理解してもらうのは難しいので、外に理解してくれる人が必要だと思います。

でも、親が動いてくれないと 10 代の頃って自分から動けない状態なので、支援機関とかあっても行ける段階じゃないというか。学校に来なくなったら先生を通して支援機関を教えてもらうしかないのかな。先生から親に支援機関を紹介とかしてもらいたいです。親に理解されるのは無理でしょうけど、でも放り出されるのは辛いです。

＜世の中は怖い＞

面接なしで雇ってはもらえないでしょうし、やるしかないですが面

接は怖いです。世の中、嫌なことしかありません。

就労移行支援事業所の話に戻りますが、卒業されて私が泣いちゃったメンバーの方とメール交換するようになったんですが、その方は障害者雇用枠で就職されたんですね。働いていたら、その職場で、あそこの部署は障害者の集まりとかって、陰口言われてイラッときたって言っていました。法律的には精神障害者の雇用率が上がって、数年前より就職先の幅が広がったって聞いているけど、でも陰口を言っている人にはどうせ分かりっこない。注意されても、はい、すみません、で終わり。世の中の人は冷たいと思います。

＜気持ちを分かってくれる人の存在が必要＞

どんなサポーターが良いかと言われたら、気持ちを分かってくれる人が良いです。若者サポートステーションの担当の方みたいな人がいたら相談したいなって思います。カウンセラーみたいな感じの方と何度か話すことはありましたけど、あんまりでした。

人によって違うので分からないですけど、自分で動ける人じゃないとなかなか就職には結びつかない。こういう若者サポートステーションのような所が基本的に第一の相談だと思う。私は、なかなか就職に結びつくことが難しかった。若者サポートステーションの紹介で職場体験もしたけど、次につながらず終わってしまったし、体験の受け入れ先も不親切だった。

私の場合は、雑談が苦手なので就労移行支援事業所に行っても、何か分からないことを聞くとか必要に迫られてだったらなんとか言えるんですけど、たわいのない話とか無理です。でもそういうたわいもない話ができる仲間がいるのが良いって言う人も中にはいると思うんですけど。

ひきこもりの方のフリースペースがあっても、私はその中に入れないなと思っています。一対一の相談員さんとの相談の方が気軽に話せはするけど、就職に結びつくのは無理なので就労移行支援事業所のカリキュラムがしっかりあって、その流れに乗って行けるという環境と若者サポートステーションの何でも気軽に自由に相談できる場所と両方あったのが私には良かったのかな。

いまは就労移行支援事業所に、私の居場所が出来てきた感じがします。ただ、慣れるまでは苦しかったので、若者サポートステーションの担当の方に頼っていました。訓練する場所と相談できる場所の両方がなかったら私にとってはダメだったと思います。

＜将来は“社会人”になりたい＞

将来は、普通に仕事して一人暮らしして、それなりに好きなことして、それなりに友達がいて、社会に対して恥ずかしくない人間になりたいというか、社会人になりたいです。

支援者からみたコメント

ヒアリングをして少し時間を経ってからこのコメントを記入していますが、Ｂさんは無事に就職が決まりました。

私が感じていたＢさんの印象は、家庭や学校でのこれまでの経験から自分が劣っているのではないかという不安を強く感じていて、人と接することに対して極端に自信が持てない状態であると同時に、そんな自分が変われたらどんなに素晴らしいだろう、人と関われるなら関わりたいという強い希望を持っている方だったということです。

サポートステーションに来てからの始めの２年ぐらいは、理想と現実のギャップの大きさに、ときには素直になれなかったり期待をして裏切られたりして思うように現状を変えていくことができず、苦しみながらも力を蓄えていた時期だったと思いますが、その時期があったからこそ最近の目覚ましい成長があるのだと感じています。またそれ以上に、明確な社会的欲求や、現状や自分自身を客観的にとらえて分析する力、それを自分の言葉で伝える表現力、相談というコミュニケーションの場を通じて成長する力をご本人が備えていたことが大きかったので、支援者ができたことがあるとすれば、それらを引き出す手助け程度だったと思います。

3 ひきこもりから フリースペースを利用したＣさん（女性・35 歳）

小学生のときから学校を休みがちになり、中学のときに本格的な不登校となった。高校・短大と進学・退学をし、アルバイトを経験しながら、ひきこもり当事者グループ、ＮＰＯの居場所と出会う。現在は通っていたＮＰＯに勤務し、同様の境遇にいる若者の相談にのっている。

キーワード

◎　集団へのなじめなさへの気づき
◎　親の感情をぶつけられて
◎　他の人たちとは違う道を歩んできたという引け目
◎　精神科受診、当事者グループとの出会いで情報が入る
◎　フリースペースに行ってみたい
◎　その場その場でのっかってみた
◎　揺らぐ自分を受け入れることができた
◎　私の経歴を知らない人たちの存在に救われた
◎　支援機関の方々へ伝えたいこと

＜集団へのなじめなさへの気づき＞

集団になじめない、同年代の子どもたちの中で過ごすということに何か不安を覚えるというようなことがありました。幼稚園のころ風邪を引いたかで遅刻して、登園時間より遅れて行ったことで、みんなが教室の中で遊んでいるところに入っていくのがとっても不安になって、ドアのところで泣いて、入りたくないと思った記憶があります。

小学校６年生の時に、クラスメイトから、からかわれたり、言葉でいろいろ言われたり、机を離されたりというようなことがあり、そのことが耐え難くて時々休んでいました。１週間ぐらい休んだらまた学校に行ったり、また何か起きると２～３日休んだりということを繰り返していました。

本格的な不登校になったのは中学生です。直接的なきっかけは部活動でした。友達に誘われて運動部に入りましたが、自分は運動がとっても苦手で嫌だなと、しかも先輩後輩の上下の関係というのが今一つ自分の中では理解できませんでした。

学校に行かなければ部活の時間はやってこないという短絡的な考え

で、なんとなく学校をさぼっているうちにどんどん行き辛くなって、１年の秋頃からは完全に学校には行かなくなりました。そのまま中学３年間は通わずに卒業しました。

このころの精神状態は、これまでの人生で一番暗く、あまり記憶にもありません。 家に自分の部屋がありましたが、完全に扉をしめ切って、つっかえ棒をして家族が入ってこられないように過ごしていて、部屋から一歩も出ず、夜に家族が寝静まったら、お風呂に入ったり、台所にご飯を探しに行ったりしていました。

中学３年生のとき相談教室（適応指導教室）に通い始めたのですが、きっかけ自体は覚えていません。私が昼間家にいることがだんだん日常になってきて落ち着いてきて、私としても少し気が楽になってきた部分があって、そんな時に学校ではないけれど通うところがあるということを聞いて行ってみました。

担任の先生にも非常に気にかけていただいて、一度も会ったことのないクラスメイト全員の手紙を持ってきてくれたり、よくしてもらいました。どう反応したらいいんだろうとか思ったんですが。ただ、学校に行こうかっていう気持ちになるかというと、全くなりませんでした。

＜親の感情をぶつけられて＞

母親は学校に行くのは当然のことだと思っていたので、学校に行きなさいと言われました。私としては学校に行けない状態で何とか逃げだしたいので、実際遺書を書いて夜中に死のうかなと思ったこともありました。学校に通って欲しい、普通に生活して欲しい、なんでそれを出来ないのかが分からない、母親自身が困って、混乱していて、それをぶつける先がないので私に直接ぶつけてくるっていう感じでした。

＜他の人たちとは違う道を歩んできたという引け目＞

中学を卒業して働くことは難しかったので、中学校の先生から高校（サポート校）を勧められ入学を決めました。

私が入学したコース自体も不登校だった経験のある人を対象にしたコースだったので、同じような経験をした人達ばかりで、気分的には非常に楽でしたが、丸一日そこにいるというのは自分にとっては負担が大きくて、お昼頃から登校するとか、週に 1、2 回お休みをしながら登校する。ただ、その分は休みの期間に補習などに対応してくれて、割と柔軟な対応があったので何とか卒業まで通い続けることができま

した。
　その後、短大に入学したのですが、私の高校は授業内容が基礎的なものだったので、大学の勉強に自分がついていけませんでした。あと、短大は女性ばかりだったので、その華やかな雰囲気の中になじめない、一般的な華やかな子たちと自分の通ってきた道は違うんだなという引け目のようなものを感じ、疎外感を感じて次第に足が向かなくなりました。

＜精神科受診、当事者グループとの出会いで情報が入る＞
　結局、短大に通えなくなり、高校時代のアルバイト先で働いていたのですが、不況のあおりでアルバイト先が閉鎖することになって退職しました。
　その後また、何もせず家にひきこもって過ごしていたところ、母親から病院に行って治してもらいなさいと言われました。言うことを聞いてやっている、というアピールのために精神科を受診しました。
　精神科は月１回、母親へのアリバイ作りのために通いました。投薬しても特に状況に変化もないということで、医師からひきこもりの当事者の会を紹介されました。
　当事者グループでは同じような経験をしている方と会えましたが、参加者が多くいて、疎外感を感じてしまい馴染めないなと思っていました。ただ、そこで出る話題は自分でも思い当たるところがあるし、いろんな人達が、例えばこういう会に行ってるよとか、こういうアルバイトしてみたよって情報交換の場というようなことも参考になって通いました。

＜フリースペースに行ってみたい＞
　当事者グループで話しを聞いているとき、あるフリースペースに参加している方がいて、私にも参加できそうかなということで行きました。
　そこのフリースペースのスタッフの方が、私と同じ街に住んでいて、私の家の近くにもフリースペースを運営している団体があるから行ってみたらと勧められました。それが現在勤めることになったNPO法人です。

＜その場その場でのっかってみた＞
　必ずしもひきこもっているから家から出たいとか、この歳で働いて

いないのはよくないから、仕事をした方がいいんじゃないかなというふうに思って動いてきたというわけではありません。その場その場で声がかかったのにのっかってみたり、誘われたものについて行ってみたりというような、割と主体的ではなく、なし崩しとか巻き込まれとか言ってるんですが、その都度、自分の前に機会があった時に身を任せるようなやり方でいろんなものに関わってきて今があります。

＜揺らぐ自分を受け入れることができた＞

私の自己肯定感は、すごく相反するもので、一方では自分がすごく大切な存在であると思っているし、一方では、人に受け入れられないんじゃないかと強く感じています。その時々によって、その両者のバランスがすごく揺れ動いて、その都度、行ったり来たりを繰り返します。

ある方の本を読んで自分としてすごく共感できるなという一節がありました。「人は回復していくときに悲しみが伴っている」。もちろん前向きで元気に頑張れる自分であれば、人にも受け入れられる、自分にとっても望ましい。 けれども、同時に些細なことで悩んでしまう自分、ひきこもってしまう自分というのもまた自分の一部であるということを強く感じているので、その部分を手放してしまうことに躊躇があるのかなというふうに感じています。

ひきこもる自分、他者と打ち解けない自分、社会の中でいづらさを感じる自分というのが自分である、 ということを、28、29 歳あたりで気がついた時がありました。他の人から出来てるって見えても、自分は出来ていないと思ってしまう。それは、事実であるかどうかではなくて、いろんな捉え方がある。自分とはこういう人なんだということが少し揺らいで楽になったというのが、一番大きな変化したところだと思います。

＜私の経歴を知らない人たちの存在に救われた＞

正直に言うと自分があまり手助けを必要としているという風に思ったことがないです。自分があまりにも辛い時は、そもそも人に話をしようというような気持ちにもなれないし、会うこともしたくないというような状況なので、私の場合は、自分で考えたり、本を読んだりして、自分の中に湧き起ってきた感情、それの基となった課題というものを少し整理できた段階で、そのことを誰かに話できる環境があると非常

に良かったと思います。

25、26 歳の頃は、最初に通ったフリースペースのボランティアをしながらパン屋のアルバイトを始め、現在勤めているＮＰＯでの研修も始めて、色々な事を掛け持ちしていたことが非常に自分には良かったと思います。

それぞれで接する人も違って、活動内容も違うので、一つのところで煮詰まったとしても他のところではいつもと同じような日常を過ごすことができる、更にそこで煮詰まったことを青少年センターで相談するときに、話をすることで自分なりに整理ができていくっていうことは、非常に大きかったかなと思います。

アルバイト先のパン屋は、家族経営で非常に小さいお店ですが、そこで働いている人達はそもそも、ひきこもりについてはよく分かっていません。そのことよりも決まった仕事を真面目にやってくれれば十分ということで、その人達が私のことをすごく認めてくれて、それまで自分の周りにいなかった商売をする人達の感覚だとか、周りにいなかった人達の物事の捉え方というようなことをそこで知って、そういう風に考えている人もいるんだとか、そういうやり方もあるんだっていうことが自分の中ですごく自分自身を相対化するのに役に立ちました。

私の勤める NPO では商店街の方と関わる機会というのを非常に多く作っています。商店街の人達は私にすごくざっくばらんに接してくれるんです。その人達は私の経歴を全く知らないし、興味もないということがすごく自分にとってはありがたかったです。

それまで関わってきた人達っていうのは、支援機関の人達ですから、自分を受け入れてくれるのは当然だというところがあります。そこでは自分の安心感というのはあまり得られず、普通の人に認められたっていうのが自分の中ではすごく大きく、自分も評価できるなっていう風に思えました。

アルバイトをしていたおかげで貯金があったので、その後のいろんな活動に参加できたことは、自分にとって非常に大きかったです。親にお茶を飲みに行くからお金をくださいとは言いづらい部分があったので、自分の蓄えの中からやりくりできたのは非常に大きかったです。

＜支援機関の方々へ伝えたいこと＞

親はそもそも自分が苦しんでいるのは、子どもに原因があると思っ

て、子どもが変わってくれれば親はこんな思いをしなくていいのにっていう風に思っているんだなと気づいたときがありました。

でもそれは、親自身の悩みであって、私が背負うものではないんだなっていう風に、私の側は気づきました。

支援機関の方々には、親の困っている課題と本人の困っている課題っていうのは、まず別のものだって整理をしてもらえると非常に有り難いです。

家族の構成員の中に、ひきこもりの状況があるっていうことに、親は不安、怒り、心配と、色々な感情が起きてくるのは分かりますが、それは家族にも課題があるっていうところを、伝えていただけると良いです。

本人としては自分も大変なのに、その大変な自分のせいで家族まで困っているっていうのはすごく負担が大きいです。

しかも、本人は学校に行けば解決できる、家から出て仕事に就けば解決するのは分かっています。ただ現実の自分は今そんな状況にない、その力を持ち合わせていない、解決できない、その罪悪感とか申し訳なさとか期待に応えられないなっていう気持ちに二次的にさいなまれるので、もう少し家族の側が理解して、対応してくれたらありがたかったなと思っています。

支援者からみたコメント

「もう十分にひきこもったので、（社会に）出ようと思った」と言います。そのタイミングに彼女の好きな本に関わる機会が得られたことは大きかったと思います。

家族（特に母親）との関係が未だに上手くいかないようで、家族と離れて暮らすと更にいい方向に向かうでしょう。極めて論理的かつ客観的な思考をするため、自分の課題も冷静かつ明確に自覚しています。我々だけでなく、地域の人達（商店主やお客様）と関わることで、人間関係に対する苦手意識は少なくなりました。外から見ると、むしろとても上手に関係を築いています。

自己肯定感を高める、とはよく言われることですが、彼女と関わるうちに自己肯定感が低いままでも社会参加する方法はないか、と考えさせられます。

4 親の蒸発を経験、自立援助ホームを利用したＤさん（男性・24 歳）

中学３年生の時に両親が蒸発し、行き場を失う。高校を中退せざるをえず、住込みの仕事を始めたが長続きしなかった。児童相談所に一時保護の後、自立援助ホーム（＊）を利用し、就労自立を目指す。17 歳で退所して働くも、事件を起こし中等少年院に入所の経験を持つ。現在はパチンコ店に勤務し、仕事も安定している。この間自立援助ホームが関わり続けている。

（＊）自立援助ホーム（児童自立生活援助事業）では、義務教育を終了した 20 歳未満の児童であって、児童養護施設等を退所した人、またはその他の都道府県知事が必要と認めた人に対し、こうした児童が共同生活を営む住居において、相談や日常生活上の援助、生活支援、就業の支援等を行っている。

キーワード

◎　高校合格と突然の親の蒸発
◎　安定するまでの長い道のり
◎　自暴自棄になって荒れた時期。今の生き方に納得していない
◎　20 歳越えたら自己責任という思い。
　　困ったことがあってもどうにかしてきた
◎　どうにかなると思えた理由
◎　私からの提案
◎　将来の夢

＜高校合格と突然の親の蒸発＞

中学を卒業するまで両親と暮らしていました。一人っ子です。親は営業職で２年に１回は引っ越していたので、転校も多かったです。友だちが２年ごとにいなくなるので辛かったです。いまみたく携帯を持っていないので友だちとは連絡を取り合うこともありませんでした。

中学を卒業して高校まで受かってましたが、それと同時期に親が二人とも蒸発しました。恐らく借金だったと思います。

自分はそこから友だちの家を転々として、住むところも食べるところもないので警察に保護されて、児童相談所に一時保護されました。

親が見つからないことが分かり、暮らすためには住むところ含めて仕事しなきゃいけなくなり、高校辞めて、旅館の住み込みの仕事を見

つけて働き始めました。

旅館は、自分の交友関係が結構どうしようもなかったので、交友関係を切るために良い機会だと思って、わざわざ遠いところにしました。

その旅館は３ヵ月くらいで辞めました。朝５時から深夜12時まで働いていたので勤務時間が長くて辛かった。その後、その旅館の料理長のつてを頼って遠方まで行き料理の板前修業やって、でも続かず辞めて、児童相談所に戻ったんです。

ちょうどこの時期に、自立援助ホームが出来たこともあって、児童相談所から勧められました。自分には住むところを探して働くか、自立援助ホームに行くか二択しかなかったので利用することにしました。

＜安定するまでの長い道のり＞

自立援助ホームでは働きながら自立を目指していて、最初は鳶を２カ月、八百屋を３カ月、その後にフライパンとかのテフロン加工をする塗装工場に１年くらい勤めました。自立の目途が出来て、会社の社長名義でアパートを借りることができました。

でもそこを辞めるときに、住むところも無くなってしまったので、また知り合いを頼って遠くの大きなホテルで働きました。そこで、17歳のときに、いろいろ人間関係があって、恐喝をやって、金取って捕まって、中等少年院に入りました。捕まったときに、自立援助ホームに連絡が入って、面会してもらったり、服を送ってもらいました。

少年院退所後に、自立援助ホームで３週間くらい引き受けてもらって。アパート借りるお金を立て替えてくれて、仕事は自分で決めて引っ越して、そこで保護観察を受けながら、仕事して。最初が工場で短期間で辞めて、自転車屋で働いて。ちょうど保護観察が終わるころに、パチンコ屋で働きたいなって思っていたので働くことにしました。

また仕事を１年くらいで辞めて、住むとこなくて困っていて、路上生活者の就労支援センターに入所しながら、パチンコ屋をまた探して働いて、最初の給料が出るときに、その施設も退所して、パチンコ屋の寮に入りながら１年少し働きました。

その時に出会った方と結婚して、子どもができて、パチンコ屋の給料では生活できなかったので、キャバクラで働き始めましたが、その間に離婚しました。そうすると別にお金は必要ないのでキャバクラ辞めて、今のところのパチンコ屋で働くようになりました。

いまのパチンコ屋は働いて１カ月くらいになります。住まいも会社

の寮で、お店の上にあります。休みはシフトがバラバラで、不規則なんです。

＜自暴自棄になって荒れた時期。今の生き方に納得していない＞

　これまで自暴自棄になって荒れた時期もありました。中学出て、貯金して自分で家借りて仕事していく生活に、到底納得いかない部分がありました。本音を言えば､高校に行きたかったですよ。支援といえば、いきなり働かせるんじゃなくて、高校行きたい人間であれば、行かせてあげるようなところを作ってあげれば良いと思います。

　家庭環境によるでしょうけど、社会を含めて全ての人が無責任ですよ。中学出て、本人の意思を無視して、家庭環境がしょうがないから仕事しろって言われても納得しないですよね。高校に行くことができない人間をいきなり社会に追い出すわけですから。ただの厄介払いです。だったらある程度、高校出たからどうこうとは言わないですけど、知恵をつけて、学歴をつけて社会に送ることが順当なやり方じゃないかなって思っています。

　そういうところで自分らも葛藤するんです。今の生き方そのものに納得してないから。今の仕事するのも学歴必要だし、今でも学歴があった方が良かったなって。職種も広がったし、自分のやりたいこともやれただろうし。

＜ 20 歳越えたら自己責任という思い。
困ったことがあってもどうにかしてきた＞

　基本的に根が面倒くさがりなんで、何やっても全部自分に返ってくる。だったら別に普通に仕事してれば、金も稼げる。真面目にやっていたら給料も増えるし。

　そもそも貯金をしてというような長期的な目標もなかったですし、金がなくなると、よし、頑張ろうって気になるんです。あると働きたくないっていう。仕事をしている感覚はないんです。稼いでるという感覚なんです。

困っていることは 20 歳超えて、そこまでないですね。だって、ある程度自分の名義さえあれば、携帯も買えるし、家も借りれたので。

車の免許は取りに行く時間がなかった。合宿とかで取りたいなって思っても、1ヵ月も仕事を休めないですからね。収入が無くなってしまうので。

身分証明する場合は保険証と住基カードがあるので困らないです。困ったことがあってもどうにかなってきました。

年齢的にも 20 歳以降は自分次第じゃないですか。あとは、支援者がいるんであれば支援機関に自分からつながればいいだろうし。その支援が自分にとって邪魔だったら関係を切ればいいだろうし。20 歳超えたら自己責任じゃないですかね。

＜どうにかなると思えた理由＞

自立援助ホームは最初、児童相談所を出て自分でもどうしようもない時に関わった原点です。自立援助ホームの関わりを断つ理由はないです。生活が最悪になったときにどうにかなるかなっていう感覚はあります。少年院から出るとき引受人がいなければ出られなかったときに、自立援助ホームがなかったらもっと下に落ちていったかもしれない。でも一番底の部分で支えてくれているからそれより下には落ちないので、どうにかなると思っていました。

＜私からの提案＞

20 歳までってほぼ無力に近いんです。何にも出来ない。仕事するにしても保護者の同意が必要、未成年で引っかかるのも多い。20 歳くらいまでは何かしらの支援が必要と思うんです。

長期的に支援する自立援助ホームのようなところがあると良いと思います。選択肢の中で、働かざるを得ない、自分でやんなきゃいけないって選択をする前に、自立援助ホームみたいな形のもので、例えば 2 年、3 年周期で利用できるところだったら、もう少し規模が大きくてもいいかも知れないし、どうしても定員の制限があるだろうし、もうちょっと間口の広い形であった方が良いんじゃないかなと思います。

民間に頼らずに県でも作ればいいわけですよね。例えば県で無償化してやれたら良いと思います。自分でやりたいのであれば長期的で、例えば、お金を貯めて。本気でやろうとしてる子がいるんだったら、そういう支援も必要だし、民間じゃなくて県でやることによって、あ

る程度余力も出来るだろうし。最後の砦みたいな形であればいいと思う。それを公的に、県あたりがきちんと無償で、ほんとに切羽詰まっちゃった時に面倒みてくれるような場所を作って欲しい。その方が、ある程度本人の話を聞くにしても民間には無いプロ的な人達を雇えるでしょうし、働く人たちも生活設計を立てられるだろうし。

＜将来の夢＞

短期的な目標でいくと、パチンコ業界である程度の地位までいきたいです。長期的には、キャリアを積んで、集客術を学んで、いずれは、例えば集客とかマーケティングを主体とした講師のような形で仕事をして行けたらいいかなって。不安は強いていえば、お店がなくなることですかね、時代的に。

支援者からみたコメント

お金がなかったり住まいがないとか、Ｄさんは客観的に見たらいろいろあったと思います。でも行動力を持っているので、本当に困ってもどうにかやってこられました。今まで職を転々としてきたこともそうですけど、取りあえず「何とか生きていく」みたいな生命力を持っているんです。それは彼の中ですごく必死にやってきた部分があって、つらい、しんどいけれど、それを乗り越えなきゃしょうがないというところで、頑張ってやってきたんです。

だから、人間関係もナイーブな部分もありながら、上手くやるためにすごく考えすぎて、気持ちが疲れてしまうこともあります。

彼が困ってないと言いながら、そこを乗り越えて来たところはあります。ただ、つらくてしんどかった時期、自立援助ホームを出てから７年間ずっと、随時やり取りをしてきたり、職場に行ったり、本当に困った時、どうしたらいいかって悩んでいたときにつながっていたのはホームだけでした。

5 乳児院、児童養護施設、自立援助ホームを利用したＥさん（男性・21 歳）

乳児のときに両親が離婚。母親に引き取られたが養育が難しく、乳児院、児童養護施設（２カ所）を利用した。中学卒業後に住込み就職したが離職し、児童相談所に一時保護され、15 歳で自立援助ホームの利用となった。働きながら定時制高校に通うも両立が難しく中退。その後､高卒認定に合格した。職を数回変えながらも生活している。現在は､飲食店に勤める。継続した自立援助ホームの関わりがある。

キーワード

◎　親と離れた暮らしが辛かった
◎　受け入れられない。15 歳で働く現実
◎　児童相談所の心理士に救われた
◎　親代わりの自立援助ホーム。心の中に残る存在が大事
◎　頼れる先の無い怖さ。精神的な支え
　　常識と社会でもやっていける環境づくり
◎　お世話になった人への恩返し

＜親と離れた暮らしが辛かった＞

きょうだいから聞いた話では、親同士の関係が良くなくてすぐに離婚して、母親がきょうだい４人全員引き取りましたが全員は面倒見れなくて、僕はすぐに乳児院に入ったようです。その後少し、親元で暮らしていましたが親が大変だったというのもあって、前の児童養護施設とは別のところに中学卒業するまで８年生活をしました。

正直なところ施設にいたときは常に辛かったです。一番は親と離れて、きょうだいと離れて暮らすことです。４人きょうだいで一番下ですが、上の三人はみんな別の施設で暮らしていました。きょうだいの姉だけの連絡先は知っていて、いまでもよく会っています。

母のことは全然知らないです。僕が施設入った時が最後でそれ以降会ってもいない。僕はまだ小さかったので、よく分かってないからこそ辛い感じだった。

＜受け入れられない。15 歳で働く現実＞

施設を出て中卒で、蕎麦屋に就職しましたが、ひと月くらいでその

仕事が続かなくなりました。お店の仕事がきつかったのもそうですが、中学で勉強もして頑張ってきたのに、本当ならみんなと同じように高校行って勉強してっていう生活を送りたかったけど、そういう環境にいるせいか、高校に進学できない状況になってる現実にやっぱり自分が受け入れられなかった。周りは高校に行っているのに、なんで自分だけこんなことしているのかって思いました。

＜児童相談所の心理士に救われた＞

仕事を辞めて児童相談所の一時保護所を利用しました。その時、精神的にもこれから何をしていいか分からなくてどうしようかって悩んでいた状況でした。一時保護所の職員や心理士に話して、少しずつ時間をかけてケアされてきたおかげで、今立ち直ることができました。その時に、自立援助ホームのこととか知れたので、いま自立援助ホームの方と会っているのも一時保護所での生活のおかげでした。

＜親代わりの自立援助ホーム。心の中に残る存在が大事＞

親がいないという現実は、今は受け入れているので、自分の中で理解もしているので平気です。どちらかと言うと、今では自立援助ホームでお世話になった人達の方が僕としては親近感があります。

自立援助ホームの方は、自分の人生の分岐点の一番大事な時に一番チカラになってくれた人なのでお世話になってもいますし、親代わりではないですけど、それくらい関わりが深い人達です。

利用していた当時は、まだまだ子どもの考え方をしていて未熟だったので、職員といろんな事で揉めました。

でもそういう時に自分の間違いをきちんと教えてくれるじゃないですけど、言ってくれたことがとても重要だと思いました。そこで言われたことを何もしなかったり、そのまんま流れて行ったらまた違う生活にもなっていたし、逆に今自分がこうやって正しくやっていけているって感じています。

児童相談所の人は異動したり、18 歳で終わっちゃうけど、自立援助ホームは退所した今でもまだ関わりがあるし、今でもお世話になっていることもあるので、すごく悩んだり、相談したいことがあったら相談するし、会いたいなって思う時もあります。そういうのって自分の中ですごく大きな存在なんだなって思います。

自分から何かしたいって思える人って、友達とか仲良い人じゃない

となかなかいないです。だから自立援助ホームにはそれだけ思い入れが強いんだと思うんです。

僕自身の問題もそうですし、例えば知り合いが困ってるとか、きょうだいが困ってるとかそういう事でも相談にのってもらえます。家族が近くにいればいいですけど、近くにいない子からしてみると、自立援助ホームのような長く関わってくれる存在が一番大事だと思います。物理的な距離、遠い近いというのは関係ないです。連絡取ろうと思えば携帯でもなんでもあるので、存在が大事なんだと思います。

＜頼れる先のない怖さ。精神的な支え。
常識と社会でもやっていける環境づくり＞

頼れる人がいないって一番怖いと思うんです。何をするにも何気ないことを聞いたりとか、そういう知識を持ってる人の話を聞いたりすることって結構今後の上でも役に立ってくると思います。

特に親とかから離れている子たちなどにしたら何かしらの支えじゃないですけど、心の、精神的な支えになる人が、絶対必要だと思う。

そういうサポートがあればすごく助かると思うんです。逆にそういう人って施設とか自立援助ホームみたいなとこでしか支援者と会えないと思うし、逆に一般の子とかってどうしても児童相談所をよくは思ってないですが、10 代のころには必要です。

でも 20 歳ぐらいになればそれなりに多分いろいろ学んでると思う。あとは、考え方とかそういう個人の問題になってきちゃうので、その前のやっぱり 15 歳からは 20 歳くらいまでに必要です。

少なからず 15 歳から 18 歳の子も、ある程度の常識と、社会に出てもやっていけるような環境つくってからでないと、そのあとがやっていけないと思います。

＜お世話になった人への恩返し＞

将来は家庭が欲しいと思います。自分がそういう環境で育ったんで、家庭が羨ましいじゃないですけど、ちゃんと親がいて、子どもがいて一つの一家じゃないですけど、そういう団らんっていうのは憧れはあります。ただ自分が小さい頃にあった、その痛みじゃないですけど、親から離れて、親から見捨てられたりっていうショックはある。でも多分同じ過ちは起こさないと思う。

仕事は飲食をやっていますが、これから飲食ではもっと大きいお店

で、例えばイタリアンとかをやりたいです。福祉の仕事も、少なからず自分の人生でお世話になっているので、興味もあります。単純に福祉の人達にお世話になったっていうのが大きいですし、今自分のいる状況をみると、福祉の人たちのおかげなので。

10 代後半の時期って、道はずしたらすぐそっちに流されていっちゃったりするんで、そういうところでチカラになれる人になりたいと思いますし、今も困っている人って、児童相談所でお世話になっている人の中には多いと思います。

支援者からみたコメント

自立援助ホームにいる時に学校に行きたいっていうこともあって、働きながら、定時制高校にも通いました。

ただ仕事、学校、アパート生活の三重生活は大変で、学校に行くことがなかなか難しくなり、仕事ももろもろあって転職し、生活を立て直す必要があることで自立援助ホームに再入居をしました。

彼は、高卒認定を合格するなど能力が高く、支える環境が整えば大学に行くこともできたのです。

色々なＯＢの子達がいますが、21 歳にしてはすごくしっかりしているし、でも、反面、すごくいろんなことに悩みと葛藤もありながらやっています。持前のとても真面目な面があるので、そういう部分がこれからもっと磨かれていくでしょうし、これからも何かあったらずっとつながっていければと思います。

6 虐待により高校中退を余議なくされ、自立援助ホームを利用したＦさん（女性・20 歳）

高校進学が決まるも、親の暴力から逃げるため児童相談所に一時保護となる。家からの進学を断念し、自立援助ホームで就労自立を目指すことに。中学卒業後から現在の介護事業所で働く。ホーム退所後も頻繁に訪れ、利用している子の相談相手になっている。

キーワード

◎ 16 歳の就職
◎ 信用できる大人との出会い
◎ もっと私を見て欲しかった。親の顔色をうかがう毎日
◎ 高校に行きたかった
◎ 私の決断を大人に応援して欲しかった
◎ 福祉の枠に当てはめられる。親の素顔の表裏。子どもだけが傷つく
◎ 先生の一言が子どもを救う
◎ 友達みたいな大人が欲しい。大人以上に子どもは考える
◎ 仲間を想う気持ち。味方になりたい

＜ 16 歳の就職＞

自立援助ホームに入居した 16 歳の時に、すぐに今の仕事を見つけました。職場のスタッフがすごく温かい人ばかりで、その人達にすごい支えてもらっています。一時期、職場も行かないって言って行かなかったり。その職場の社長と管理者がホームまで来てくれて、話聞いてくれてっていうフォローがあっていままでやってきました。ほんとに、周りの大人がすごく優しくて、今まで私が出会ったことがないような大人の方達でした。

＜信用できる大人との出会い＞

今までの大人のイメージと、自立援助ホームでの大人は全然違います。今まで私が大人に対して思ってきたことっていうのは、自分の都合のいいようにしか子どもに対して伝えない矛盾だらけっていうのがあって、信用できなかったです。

自立援助ホームの職員や、私の職場にいる大人の方も、真っ直ぐなんですよね。言ったことは絶対じゃないけど、もうそれを突き通すっていうか、良いって言ったら良い、駄目って言ったら駄目っていう、そこが変な言い方、中途半端がないんです。はっきりしているので信用できるなって。

最初、自立援助ホームに来たときには何も知らないし、安心もしなかった。10 代は本当に、初めて会った人は嫌いから入る性格だった。不信感はありました。守ることは守っていたけど反抗はしていました。

今の介護の職場は、私一人でこうするって決めても、スタッフ全員に共通した支援にならないと形にはならない。毎日スタッフが一緒にいるので、その中で上司は信頼できる人なので頼っています。

前はそんな風に、一人で解決しなきゃいけなくって、サインを出していくっていうことが出来なかったですが、今は出来ますね。

一回その上司と思いっきりぶつかったんですね。お互いが言い合いっていうか、私も爆発して怒鳴っちゃったことがあって、それに対して管理者も、だったら私に言ってきなさいみたいな。言ったってわかんないじゃないか、変わらないじゃないかって言っちゃったんですど、それでも私が一人で抱え込むよりは全然良いでしょって。それで抱え込んで表情とかに出て利用者さんに迷惑かける方が介護士としておかしいみたいなこと言われて、なるほどな、みたいな。それでぶつかってからは話せるようになりました。

＜もっと私を見て欲しかった。親の顔色をうかがう毎日＞

親に対して思うのは、もっと私を見て欲しかった。ずっと一番上の兄に両親共に気が向いてて、私が末っ子なので、全然気にもされず。むしろ、家事とか家のことやっといてみたいな関わりでした。

学校終わっても友達と遊びに行けない。やらなきゃいけないっていうのが頭に先に来ちゃうほど私が家事をすることが普通になってたから。

当たり前にやらなきゃいけなかったことがあるのは自分の心の中で重かったですね。小学校時代は友達と一緒に放課後遊んだ記憶がないです。親に褒められたって記憶もない。私に関心がなかったですね。

母親は口が達者というか、反発して何を言っても返ってくる。一言ったら十返ってくるんで、反抗する気になれなくて。むしろ親の顔色伺っていました。もちろん家事とか無理って、自分らでやんなよって言っ

たこともありましたけど、そうすると、その時の親の波にもあるんですけど、親がイライラしてる時にそれ言ったら手が飛んできてましたね。

＜高校に行きたかった＞

私は 16 歳で仕事してて、同年代の子が制服着て駅にいると、ほんとは私も同じことをしていたよなって思って。自分の気持ちが切り替えられるまで、一番辛かったです。

＜私の決断を大人に応援してほしかった＞

中学校 2 年の時に、担任に家のことをちょっと話をしたら、そのまま保護所連れて行かれました。そのときの気持ちは「連れて行かれた」です。私からしたら、そんな一時保護所の場所があるとも知らなくて。

保護所に 1 回目に入った時は 9 カ月くらいいました。高校受験も控えてるっていうのと、私が高校行きたいっていうのがあったので一回様子みて親のもとに帰ろうかっていって戻ったんですけど。

親は何も変わらずで、自分の時間なくなっていってケースワーカーとの月一の面接のときにそういう話をして、もう一回、また保護所に行くことになりました。

次に保護所に入るって決めた時から、もう私は家には帰らないって決めていました。家に帰らないけど、最初高校も行きたいって気持ちがあったんですけど、高校行くなら児童養護施設に入所になると児童相談所から説明受けて、施設に見学に行ったけど、施設に行っても自分のことを我慢しなくちゃいけないと思って、それは少し辛いと思っていました。

そうしたら、一時保護所の担当職員が新聞で自立援助ホームの記事を見つけて、紹介をしてくれました。高校に通うことを諦めるなら、親元からは離れて暮らしたいっていうのがあって。

ケースワーカーには高校行きたいんだったら児童養護施設、それが駄目だったら、家に帰るしかないよって言われていました。高校を辞めるからって話したら、ケースワーカーからは働くしかないよって言われて、高校辞めてまで働くことには相当反対されました。高校受かって 5 カ月くらいしか経ってなくて保護所入ってるからもったいないって言われて。

その時に余計に、私がこうしたいって決めたことに、大人たちは何

も応援はしてくれないんだって思いました。私にとっては高校を辞めて働くって一番大きい決断だったから応援をしてもらいたい気持ちがありました。

＜福祉の枠に当てはめられる。親の素顔の表裏。子どもだけが傷つく＞

家族再統合は、きれいな言葉ですけど、非常に危険です。本当に子ども側からの立場に立っているか、ってことですよね。児童相談所で一時保護されたとき、親に会うのが怖くなっていましたが、手紙だったり、少し面会はしたりしていました。当時を振り返れば親子の再統合目指してたと思いますが、私はもう本当に連絡も取りたくないし、会うのもヤダって言う中で、職員からは先ず手紙を書いてみなよって言われて。でも嫌なんだから書けるわけないじゃないですか。14年間その環境の中で生きてきた私が嫌だって言ってるものを、何ヵ月くらいしか関わりのない人たちから言われて。その人が持ってる福祉の枠の固定概念の中に私を当てはめようとしている気がしました。

だから、そういう大人のことをもっと信用できなくなるし、自分がこうしたいってことを先ず言えない。

家に一度戻っても親の態度は全く変わってません。親は面会するときは、すごいいい顔して、大人の顔であって、ちゃんと良い顔をします。でも実際家に帰ってみれば裏の顔っていうか、変わってなかったから、大人の裏表は怖いです。

再統合を受け入れることはできないと思う。再統合をしろって第三者に言われて出来るのであれば、自分のチカラで出来てるはずだから。それができなくて、家庭の中に納まって、子どもだけ傷ついている。それをどう第三者が、上手く入ろうとしたって入れないと思う。

＜先生の一言が子どもを救う＞

こんな自分でも信頼出来るって思える大人と出会えたからそういう大人が増えて欲しい。基本的には、支援って言葉が嫌いです。そこから、上から目線です。子ども達の間で一番身近にいる大人って、親以外でいったらやっぱり学校の先生。小学校にしても、中学、高校、専門学校、大学にしても先生っていうのはどこにでもついてまわる。そこでカウンセリング室があっても行けるわけないじゃないですか。自分から行ける勇気があるんだったら違うことやってる。この関係が、一番身近にある大人と子どもの関係だよ。相談室のように、オープンに上から

聞いてあげるよって言ったって来るわけないんですよ。こういう仕組み自体、大人が上から目線になってて、子どものこと分かっていない。

だったら担任とかの方が一番子どもと接する時間あるんだから、毎日一言だけでも声をかけてあげられたら違うと思う。それだけでいいのに。中３の時の担任の先生が一番それをしてくれて、だから私は今でもその先生とは連絡を取ってます。

＜友達みたいな大人が欲しい。大人以上に子どもは考える＞

私が、小学校高学年、中学の時に友達みたいな大人が欲しかった。何でも話せるし、何でも聴いてくれるしっていう友達感覚で付き合えるような、気楽にじゃないけど、そういう大人が一人でもいたら違っていたかもしれない。

大人以上に子どもは考えて、実際、経験してるから、本当に味方になってくれる大人が欲しかった。誰か一人でもいてくれたら私の生活も変わってたかなって。

今の10代20代の本音を聞いてっていうのもあるかも知れないけど、それを聞いて、そっくりそのまんま他の子に当てはめることは無理だと思う。

ただ、一番の味方になってくれる大人が側にいて欲しいって感じる。私にとってそれをしてくれるのは自立援助ホームの職員さんだと思っています。真正面から向き合ってくれる人に出会えたっていうのは自分にとって大きい。

＜仲間を想う気持ち。味方になりたい＞

自立援助ホームに帰って来ると、もう実家に帰ってきたなっていう感覚ですね。別に何にも用なくても、行こうかなって思ったりする。今いる子たちのことも気になるから来ちゃいます。私が自立援助ホームに入ってる時にそういう人がいなかったから、やっぱり知らない土地に行って、新しい環境で生活するってなると不安。多分それが普通の大人よりも何倍も感じてると思うので、少しでも緩和出来たらなっていう想いがあります。

自分が自立援助ホームを頼ってる分、利用する子達のサポートにもなりたいから、来た子たちとかの関わりは無くしたくないかなって思います。

私は味方になれるような接し方でホームを利用する子達と接してい

きたい。この子達からしたら年上だし、自立援助ホームにいたっていうのも知ってるからどうしても先輩みたいになっちゃうけど、後輩とは思ってないし、下とも思ってない。今まで私もそうやってここで経験してきているから普通に接したい。

その時に自分が言って欲しかった言葉ってなんだろって思う分、その子に合った言葉を投げかけながら接してしていきたいな。

支援者からみたコメント

平日は自立援助ホームと職場（徒歩 10 分、介護職）の行き来のみで、休日は自ら外出することは無く常にスッタフと行動。数カ月経って電車が苦手、外出先でのことを考えると不安（何が？自分でも分かんない）なので、一人で外出しない方が良いと思っていたことを知りました。一見しっかりものに見えていました。人に頼れない、頼りたくないから、仕事に関しては常に緊張が続き、ストレスになりました。職場では何度も過呼吸を起こし、迎えに行っては見守りました。

Ｆさんが変わったと実感したのは、19 歳の誕生日を迎える頃でした。ヘルパー２級、介護福祉士の資格を得て、いろんなことに対して客観的に語り始めるＦさんになっていました。

Ｆさんはまだ母親からの束縛に悩まされています。でも親だからと表現もしますが地元に帰って来いと命令されても自分の言葉で断ったと泣きながらの報告を受けました。

そんなＦさんも入籍をし、お母さんになります。真面目で頑張り屋のスタンスは変わらないと思いますが、体験の中で培ってきた柔軟さが子育てに役立つことを願っております。いよいよ、私たちのじじ・ばばとしての役割がスタートです。

7 親からの暴力を周囲に気づいてもらえ、自立援助ホームを利用したGさん（女性・21 歳）

高校３年時に就職の内定をもらっていたが、母親の反対により取消となった。母親からの暴力があったことから、高校の友人や養護教諭に相談後、女性センターを経由し、自立援助ホームの利用となった。自立援助ホームで就労自立を目指し現在の職場に就職。継続して自立援助ホームが関わっている。

キーワード

◎　暴力のある生活が変だと気づかなかった
◎　仲間との出会いで自分が変わった
◎　大人になった子どもみたいな感覚。一般常識を知りたい
◎　傷を隠して一見普通に見える。
　　周囲が親からの暴力に気づく目を持ってほしい
◎　目標は料理屋さん

＜暴力のある生活が変だと気づかなかった＞

私は、母子家庭でずっと生活してきたんですけど、母親からの暴力があって、外から見たらちょっと異常っていうのに私自身が気づけてなかったです。周りの友達、先生からの助言でようやく、「なんか変なんだ」って気づきました。誰かが気づいてくれないと何も分かりませんでした。

自立援助ホームには高校３年の１月に来ました。入所してから割と早い時期に仕事も決まり、とにかく仕事してお金を貯めるんだという目標を第一に、出費を抑えて抑えて貯金をしました。毎月 10 万近く貯金して、９カ月でそれなりのお金が貯まって。当時付き合ってた人がいたので、一人そういう方がいるとなんか頑張ろうって思えました。

人にはすごい恵まれていて、発見してくれた学校の先生、周りの友達だったり、自立援助ホームの方たち、会社の人も女の子を普通は雇わない仕事なんですけど、理解ある人に会えたことが、運がよかったなって思いました。

＜仲間との出会いで自分が変わった＞

私が自立援助ホームを利用してた時は、全員同い年だったんですけ

ど、やっぱり、仲間がいるっていうのは、こういう子もいるんだとか、そういうのを知れて自分の世界も広がったっていうことで、私自身がだいぶ変わりました。ホームを利用している間は自立が目標なので、その間にゆっくり時間をかけて自分のペースで自立生活の練習が出来る。掃除とか洗濯、すごく苦手なんですよ。手伝ってもらいつつ、気づいたらやるみたいな。

今、困った時に助けを求められる人っていうと、ホームに住んでた時、一緒に住んでた子達は、同志みたいな家族のような存在。なにかあったら、その子たちには聞きやすい。友達だし、嫌なことあっても電話で話したり。私だけじゃなくお互い様で、みんなでみんなを心配してる。心配し合っていて、必ず様子を聞き合ったりしています。

自立援助ホームの人には、本当のお母さんに出来なかったことをしてみるみたいな感覚です。

＜大人なった子どもみたいな感覚。一般常識を知りたい＞

ホームにいた時は、驚くくらいお金を貯めていたけど、一人暮らしすると、私結構大雑把っていうか、その時の気分でいろいろと動いちゃうのでなかなかお金も貯められなくなってくる。少し反省しました。

一般常識っていうのが、よく分からないでそのまま育っちゃった気がします。私は大きくなった子どもみたいな。普通に生活してる上で、会社から出る書類とか他からくる書類とか納めなきゃいけないお金とか。目上の人に対しての振る舞いとか、ほんとに一般的なものが身に付いてなくてこのままでいいのかな。

社会に出るための、恥ずかしくない振る舞いを教えて欲しいかなって思いました。

＜傷を隠して一見普通に見える。
周囲が親からの暴力に気づく目を持ってほしい＞

親からの暴力があっても、周りには嘘をついていました。気づいてもらえそうなのに自分で隠していました。自分からは言い出せないとか、自分で親から暴力を受けていることに気づいていない子が、実際に学校にはいっぱいいると思います。気づいてもらえた人達は、それからは色々と支援してもらえることも多くて天国っていうか。自分で発信して気づいてもらえるかが大事だと思います。

私は周りに気づいてもらえて色々な支援をしてもらって、でも違う

子は気づいてもらえなくてそのまま一人でずっと頑張って大人になる。その影響もあって、私の知り合いの人でいえば、同い年のはずなのに、すごく大人びている年上の人みたいな感じになってしまっていたりとか。親から育児放棄じゃないですけど、お母さん、お父さんはずっといなくて、お母さんの方は精神疾患でずっと入院して、その子は家にずっと一人ぼっちで、生活費がなくて年齢を偽って自分で働くしかなかったって言っていて。自傷行為もすごかったし、非行だったんですけど、そういうことでしか自分を表現できない。誰にもばれないように生活してて、周りにも言えなかったみたいで、でもそういう子は一見普通に見えるんです。

気づいてあげる目を、関わる大人側が持っているということは、とても大事なことだと思います。学校でも講演会とかありますけど、その後、スクールカウンセラーの方に悩みがあったら来てくださいって言われてもやっぱり行けない。すごい時間はかかるかもしれないけど、一人ずつ面接した方が話しやすかったりします。カウンセリングのプロと年齢の近い人と２対１で話ができると良いと思います。

＜目標は料理屋さん＞

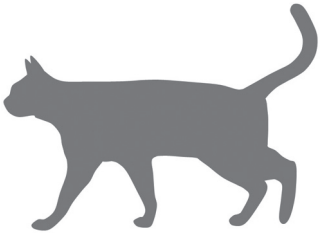
あまり現実的ではないですが目標はあります。今の仕事を三年続けて、チカラもついて、料理には興味があるので、今の仕事場から派生した料理屋を自分でやってみたいなぁって思います。今すぐにじゃなくて、10 年ぐらい先の話です。

支援者からみたコメント

Ｇさんには、最悪な環境から手を引いてくれた彼がいました。ホームも彼とつながり、大きな支えになっていました。

就職の内定をもらっていましたが、母がもみ消してしまったので、学校と連携し就活は２月に入って行動しました。現在の職場は、本来男性採用でしたが、女性であっても正規職員が絶対条件とご理解いただきました。仕事は男性に交じって頑張り、休日は彼との時間と充実していました。アパートへの引っ越しも９カ月で達成。

ところが、半年ほど経ってＧさんから体調不良の連絡が入り内科、総合病院と通院同行をしました。将来を誓った彼と別れたと泣きながら話してくれた時は精神的にも参っていたようです。精神科通院を希望し、４カ月の通院同行。一緒に電車に乗り、医師の診察時も傍にいて欲しいというＧさんは、痩せ細った身体で表情が痛々しく感じられました。美味しいものを食べながら時間の許す限りいっぱい、いっぱいおしゃべりをしました。「ホームにいた頃は彼しか見ていなくてわがままを通した。けど相談できる人がいた。帰る家があった。ホームを自分の家と思っていいんだよね」と言うＧさんは今、将来なりたい目標に向けて取り組んでいます。



8 不登校、高校中退、緊急一時シェルターから母子生活支援施設につながったHさん（女性・19歳）

中学校は不登校、通信制高校に進学するが中退。16歳で妊娠が分かり児童相談所に一時保護される。産後に緊急一時保護施設を利用後、母子生活支援施設（＊）を利用する。現在も施設を利用しながら通信制高校に通学する。幼少期より親からの暴力があった。

（＊）18歳未満の子どもを養育している母子家庭、または何らかの事情で離婚の届出ができないなど、母子家庭に準じる家庭の女性が、子どもと一緒に利用でき、心身と生活を安定するための相談・援助を進めながら、自立を支援する施設。

キーワード

◎ 今はここにいなきゃいけない
◎ 人が好きじゃないから、自分の弱さを見せられない
◎ 親の言うことを聞いて、それが無駄と分かったとき、家に居場所がなくなった
◎ 相談しても自分がもっと被害を受ける
◎ 敵は親
◎ 気づいてくれない大人たち。大人への不信感を持つと相談機関へも疑いから入る
◎ 自分が思う青年期の支援。一番助けて欲しかったのは小学校低学年
◎ 子どもより親の言うことを信じる相談機関
◎ 将来の希望は子ども

＜今はここにいなきゃいけない＞

日中は学校に行って、休みの日は友達と遊んだりして過ごしています。仕事を探した時に何に関しても高校卒業資格が必要だってことに気づいて、子どもを育てていくのに、安定する仕事に就くのに必要になっちゃうから、通学は必要と思っています。

施設の職員はうるさいけど、嫌いってわけじゃないし、暇な時は事務室に来て話したりするし、利用してよかったのかなって思うけど。真剣な話をしてる時は職員と話すの嫌だけど、普段話す分には楽しいし、みんな何かしらのアドバイスはくれる。

施設での生活に満足してるかって聞かれたら、満足はしてないですけど、自分が生活していく中では、今ここにいなきゃいけないのかなって思います。ゆくゆくは、子ども達と外で暮らしたいなと思っています。今、それはまだ無理だから、ここにいます。

＜人が好きじゃないから、自分の弱さを見せられない＞

人にあまり意見を言われるのは好きじゃないので、ほんとに無理だってなった時は、誰かに頼るけど、基本的には自分の中で解決したいと思っている。あまり人に頼ろうと思わないし、施設にいるだけでも十分やってもらうことやってもらっているので。頼っても解決してくれるかっていったらそうじゃないし、解決までの道のりのアドバイスを少しもらえるだけで、解決しなきゃいけないのは全部自分です。

今も真っ直ぐ生きてるわけじゃないけど、ずっとこんないい子やっていたわけじゃないし、それなりに社会は見てきたつもりではいるから、人との付き合いも大切だけど人との距離感も大切だと思う。

自分で解決しようとして、解決できなくて自殺とかしちゃう子もいるし。それが変な方向に走っていっちゃう子もいる。みんな自分でなんとかしようと思って、一回溜め込む、一回溜め込んじゃうともうその溜め込んだものってなかなか出ないと思う。

私は基本的に人が好きじゃない。人前では明るい性格だから友達とかと仲良くなることは出来るけど、絶対に自分の弱いところは見せようと思わないし、誰かに相談しようとも思わない。

なんだかんだで信用出来るのは、最後は自分。他人は所詮他人、親やきょうだいとかも所詮は他人であって、ただ血の繋がりがあるだけ。

相談所や施設の人も、ここを退所したら他人だから、施設にいる間だけ楽でも退所後に困る。今いろんな人の言う事聞いて、何々やってと言われたことをやってれば楽なのかも知れないけど、今だけこんな風に言われても別にって思う。

＜親の言う事を聞いて、それが無駄と分かったとき、家に居場所がなくなった＞

親のいう事を聞いていて、それが無駄なんだなって気づいた時に、逃げる方向は間違っていたけど、小学生で万引きとかやっていた。中学生になって 18 から 20 歳くらいの人達とからんで、夜遅くまで帰らないとか、自分の中で居場所はここじゃないって気づいていたけど、

でもそこに逃げるしかなかった。家がいる場所じゃなくなったら、もうどこにいても一緒かなって。

中学生の時に誰かに相談したりとかは無かったです。なかったから今こうなっているのかも知れない。相談っていっても中学の時とか悩んだら「ここに電話を」と連絡先の書いてあるカードが配られていたけど、使おうとも思わなかった。電話はすごい勇気がいる。そういう時期に、自分から大人と関わろうと思わなかったし、自分なりに考えながら付き合っていくけど、別に自分から好んで大人に相談とかしようとは思わないです。

＜相談しても自分がもっと被害を受ける＞

小学校の時は、先生に話したらまずは親に連絡がいく。児童相談所にも話したら、お子さんがこういう事言ってるんですけどって、親に聞いて、親もその場では良い対応するんだろうけど、家に入ったら家族だけの関係であって、暴力が悪化するだけのこと。相談しても結局は自分がもっと被害を受けるだけになる。

子どもは、親次第でどうにでもなると思います。いいお父さん、お母さんを持てば、ほんとに素直な子が育つだろうし、友達とか見てても、この子の家庭環境はすごく良いんだろうなとか見て分かる。産まれてから 13、14 歳くらいまでの間に、もし子どもが何か間違った道に進もうとしているのであれば、大半が親の責任だと思う。基本は、親に何かしらの問題があるのかなって思います。

＜敵は親＞

自分の中で何より敵なのは親なのかなって。もう、家に戻ろうとも思わないし、20 歳になったら戸籍上からも抜いてもらおうと思ってる。それはもう、私自身が子ども産む前の 15 歳から 5 年間考えても気持ちは変わらないし、薄れていくこともない。自分の性格が曲がってるのもあるかも知れないけど、親に対しての感謝が生まれてこないって、その関係が悪かったからだと思う。

＜気づいてくれない大人たち。
大人への不信感を持つと相談機関へも疑いから入る＞

私くらいの年齢の子たちの何かを変えようとするのは、多分無理だと思う。変えられるのはきっと、今小学生くらいの子たちだと思う。

きっと私くらいの年齢の人に相談できるところがあるよって言っても絶対に行かないし、むしろここまで大人に対する不信感とか持ってると、逆に相談機関にしても疑いからしか入れない。

中学生になると自分の行動できる範囲が広がってくるし、周りからの良い情報、悪い情報も入ってきて、自分がどんどん出来上がっていく。それを正そうと思っても、それこそ本当に難しいことだと思う。

＜自分が思う青年期の支援。一番助けが欲しかったのは小学校低学年＞

だから青少年の支援が広がっていくのだったら、もっと低年齢層なのかなって思います。自分が一番助けて欲しかったのは小学校低学年だった。この年齢になってから相談先を言われても、受け止めず流しちゃう。自分の心が出来ていくのって小学校とか、もっと早ければ幼稚園とかで出来てきちゃう子もいるから、自分に今、こういうの必要ないなって。この年齢になると、例えば親からの虐待だの、大人からの押さえつけだのって自分達で逃げられるようになってしまう。

小学生だと自分自身で逃げられない。全部大人が決めるし、何もかもが大人の基準になるから、低い年齢層の子に絞ってあげると救われる子は増えると思います。

＜子どもより親の言うことを信じる相談機関＞

年齢層は小さければ小さいほど助けは欲しいし、自分も欲しかった。その時は誰も気づいてくれなかったです。手あげて助けを求めたところで、親が虐待してないって言えば、児童相談所の人は帰るじゃないですか。児童相談所の人が、訪問に来て、親が大丈夫ですよって子どもを見せれば、子どもも親のいる前で虐待のことを言えるわけないし。

学校の先生も気づかなかったです。大人は外に良い顔するじゃないですか。親とかも虐待していても外ではいい顔するから気づけない人も多い。

私は親が離婚する前は父親からの虐待で、離婚してからは母親からの虐待があった。虐待って連鎖すると思うから、自分も今、子どもに手あげちゃうんじゃないかなってすごい不安だし、必死になって怒ってる時、ふと我に返って、これって親とやってることと同じなんじゃないかなって思うこともあるし、でも、そういう制御するのとか、親が教えてくれなきゃいけないことだと思う。

親から子どもを取り上げるのはよくないと思うけど、もし周りが

ほんとに不審に思うことが増えてるなら、言い方悪いけど、家から子どもを離す強硬手段がもうちょっとあればって思ってます。

＜将来の希望は子ども＞

子どもが心の支えになっている。子育てはイライラもするし、喧嘩もするけど、あの子達がいなかったら、多分、自分も今こんなまともな生活できていないと思います。自分自身の将来の希望は特にないけど、子どもの将来に希望を持っています。

支援者からみたコメント

親族の援助も受けられず、母子で過ごしていくには、母子生活支援施設しか無い状況で入所してきました。まだ未成年であるＨさんが双子を育てていくことは困難性が高く、また、Ｈさん自身が虐待を受けて育ってきたので、自身が虐待を繰り返してしまうのではないかと不安を抱いていました。双子の成長も守りながら、Ｈさんが母親として成長していけるように、一緒に目標を立てて養育支援、家事援助等の支援を通して関わり、出来たことには評価を繰り返してきた中で、親子の成長を感じている日々です。

現在、Ｈさんは自分の将来の夢に向かって、高校進学を決めて毎日学校に通いながら子育てを頑張っています。双子も年相応に成長し、職員も母親と共に成長を喜んでいます。Ｈさんが育ってきた環境の中で、経験し得なかったことを取り戻していけるように関わり、母親として成長していけるように目標を立てて支援を継続しています。

Ｈさんも訴えていたように、若年者は助けを求める方法や機関が分かりません。家庭という閉鎖された空間の中で、子どもの助けをどのように拾い上げていくのか、拾い上げた後、どのような手立てをして救っていくのかが、最大の課題だと思います。大人一人ひとりが社会全体で子どもを成長させる、見守っていく意識が高まっていくことを望んでいます。

9 自立援助ホームを経験、自活に向けて母子生活支援施設を利用するＩさん（女性・23 歳）

15 歳のときに親が離婚し、母親に引き取られるも養育が難しく、児童相談所に一時保護となり、自立援助ホームを利用。仕事を見つけ、16 歳から一人暮らしを始める。20 歳を過ぎた時に営業職に転職。妊娠が分かり、単身用アパートから立ち退きを迫られ、福祉事務所を通じて母子生活支援施設を利用している。

キーワード

◎　親の離婚。自立援助ホームを経て
◎　自立の準備のため母子生活支援施設利用
◎　心をカラにして暴力を我慢してきた。なぜ自分なのだろう
◎　自分が存在しなかった。本当は誰かに相談したかった
◎　気軽さ、フレンドリーさが欲しかった
◎　相談することで周囲に知られてしまう怖さ
◎　暴力が恐い。誰かが家のことに気づいてほしい
◎　食べ物がない
◎　進学したかった
◎　人生のリスタート
◎　目標は自立
◎　支援する人たちへ。恐い思いをするのは子ども

＜親の離婚。自立援助ホームを経て＞

私が 15 歳の時に両親が離婚して、母親に引き取られたんですけど、母親は精神疾患を患っていました。母親が私たちを育てられないってことで、児童相談所に行くことになって、そこから私は 16 歳のときに自立援助ホームに入って働きはじめて、自立の準備をして 17 歳になる前に一人暮らしを始めました。最初の仕事は接客業で、20 歳なる前のときに営業の仕事に転職しました。

きょうだいは自分含めて５人で、私が長女でした。妹は里親の方に、弟は施設の方に入りました。

＜自立の準備のため母子生活支援施設を利用＞

私が元々一人暮らしをしていて、単身用のアパートに住んでいた時

に妊娠が分かって、これから産まれるとなると泣き声とかで、隣の部屋の壁が薄かったため、アパートからの立ち退きを言われました。家を追い出されてしまったので行く場所がなくて、福祉事務所に相談したら母子生活支援施設を利用することになりました。

子どもの父親とは元々籍を入れる予定だったんですけど、向こうが働いてくれてなかったり、子どもは産まれてきてどうするかってなった時に、このまま結婚して子どもを育てられなかったら困るし、子どもの未来の方が大事なので縁を切らせてもらいました。

母子生活支援施設は私の母親が弟と妹を連れて、多分１、２カ月くらい利用していたので、暴力を受けた人たちをかくまうような場所っていう風にしか思っていませんでした。私の場合は暴力振るわれてないし、該当しないのかなと思っていました。共同生活っていうのが駄目で、どうしても入りたくないって気持ちが最初はありました。どうにかして住む場所考えて、なるべくお世話にはなりたくないなって思っていました。

でも子どもの父親と一緒にいればいるほど、お金はたかられるっていうのは分かっていたので、それだったら娘が一番大事だし、父親に娘を会わせたくないので、自立の準備をしながら子どもと一緒に住めて、父親に場所が特定とかされなくていいかなと思いました。

今はお金かかってないですけど、子どもが徐々に大きくなるにつれかかっていくので、将来は結婚したいなと思ってるんですけど。やっぱり育てるには父親がいてくれた方がいいかなって思っています。

＜心をカラにして暴力を我慢してきた。なぜ自分なのだろう＞

きょうだいが多かったっていうのもあって、小学生の時は、着るものとかもお下がりが多くて、なんでいつも買ってくれないんだろうっていう不満はありましたけど、親になってみて、その時は生活費がきつかったんだろうなとかいろいろ思うようになりました。

小学４年生の時に引っ越して、親同士の言い争いはあったんですけど、一番ピークだったのは中学生の時。毎晩、毎晩、口論が激しかったです。両親が毎晩喧嘩してて、それのストレスで私が兄にも殴られてました。家にも居場所がない感じです。母親は母親で、父親のそういうストレスがあって、また私が殴られました。仕方ないのかなって、ずっと心をカラにして我慢してきました。ただ逃げたかったっていうのもありますね。どこかで、なんで、なんで自分なんだろうなっていう風には思っていました。

小さい頃とはいえ、まだ立ち直れてはいないですね。

＜自分が存在しなかった。本当は誰かに相談したかった＞

中学生の時に、自分自身が不登校で、スクールカウンセラーには、自分のことを恥ずかしくて言えない、担任に相談に来てと言われても、周りの目があって絶対行きたくないっていう気持ちがありました。クラスメイトから変な目で見られるのが嫌だっていうことがありました。だから、どうしても相談したくてもできなかったです。

中学生の時は、兄が友人との金銭トラブルや、両親が離婚で大ゲンカ、そのストレスからか母親に殴られてたんで、家に帰れば家に帰ったで辛くて、学校に行けば行ったで、担任が心配そうにはしてるのですが、結局裏で嘲笑っているような感じがしたのと、クラスメイトにも頼りにくかったので、その時は本当に私には居場所がなくて、自分が存在しなかったような感じです。でも、本当は誰かに相談したかったっていうのはあります。

学校にも相談室があるんですけど、絶対利用しないと思うんです。その当時は抵抗あって相談したくても相談できない。担任にもそういう心配かけたくないし、それで生徒たちに言われて、また人に誤解生むのも嫌だし。この人って何かあるんだなって偏見を持たれるのが嫌だった。

＜気軽さ、フレンドリーさが欲しかった＞

相談できる場所があったとしてもあまり立ち寄れなかった。もっと気軽にどんなことでもいいから相談してきなよ、みたいな感じのフレンドリーさが欲しかった。

今、虐待とか多いけど、近所の人が通報しても結局家庭の事情になっちゃうので、親がやってないって言えばそれまでです。幼少期に自分の泣き叫ぶ声が聞こえたらしく、大丈夫なのって近所の人に声掛けてもらって、近所にも見てくれる人いるんだなって分かってはいたんですけど、相談はできなかったです。

＜相談することで周囲に知られてしまう怖さ＞

児童相談所の人たちが遊びにおいでって言うのですが、児童相談所は虐待を受けている子が行くところとか、そういう見方があって、友達にバレたくなかったです。言われても行きたいって思わなかった。親からは電車賃を出してもらえなかった。

児童相談所の人が他のどこかの場所で設定して、話を聞いてくれたりとかだったら、多分行くかも知れない。ただ、その場所に行って友達に目撃されて、次の日にクラスの中で話されるっていうのがすごく嫌です。友達にはバレたくないっていう中学生独特の感情があります。

児童相談所の人に喋ったでしょって親に知られたくないから言えなかった。誰かしら経由で知られると思うとすごく恐かった。自分の悩みについては一切話すことができなくなりました。

私が通っていた中学校は弁当持参の学校だったんです。私、お弁当持っていかない日が多くて、その時に担任の先生がすごい不安そうな顔して、私はもう忘れたんですってふて寝してたんですけど、そうすると先生がお弁当忘れてきたみたいだからってことで親に連絡する。それで親に叩かれたこともありました。

昼食の時間だけ教室内には、いたくなかったですね。また今日も忘れたの？とかって聞かれて、作ってくれなかっただけなんだけどなと思いながら、今日はお腹空いてないからって返事をしてました。

当時、夜ご飯もあんまり食べられてなかったので体重が全然なくて、中学 3 年生で小学 6 年生くらいの体重しかありませんでした。いつもお腹が空いてました。

＜暴力が恐い。誰かが家のことに気づいてほしい＞

その後もやっぱり、家庭がバラバラになった時（15 歳の時の離婚の時）も、どうしていいか分からなかったっていうところもあります。けど、そこは別にそんなに。自分で解決できるような問題だったので。

やっぱりきょうだいが多かったんで生活は苦しくて。母親がお金使っちゃう人だったので、家に食費が無いっていう状態が続いていて、そういう時に相談しようかなと迷ってはいたんですけど、母親がそういうことを知られたくない人で、だから誰にも言えなかった。母親に何されるかわからないっていう恐怖がありました。

誰かがその状況に気づいてくれて子どもたちを助けて救ってくれたら、私自身の心の問題は変わってきたと思います。暴力が長引いたせいで、今になっても引きずっています。

＜食べ物がない＞

誰でも良いので、どこの家庭にも家の状況を確認してもらえたら嬉しかった。母親はいい顔しますけど、どういう状況で住んでるかって

いうのは、家を見ないと分からない。食べ物があるとか、ないとか。その時に食べ物用意してくれるような所にも出会えたらなとは思ってました。

児童相談所でもいいんですが、結局それでまた親たちの反感を買うことになりかねない。反感を買うかと思うと声を上げられなかった。誰かに相談する時も恐かったです。相談したことがばれた時、タバコを押し付けられて、母親に暴力振るわれるとかあったので。

＜進学したかった＞

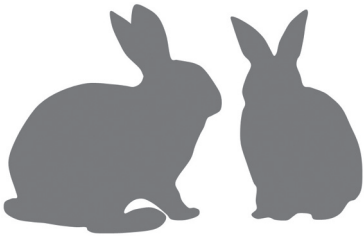
児童相談所の一時保護所の時に、施設には子どもが大勢いて、空き待ちで待たされてる感じの子どもたちが多くいたので、できたら埋めるくらいの施設が欲しいっていうのもありました。

私は、進学できる援助が欲しかったです。自立援助ホームを利用することになって進学を諦めました。その前から、働かなきゃいけないなっていう気持ちが強かったので進学なんか考えられなかったんですけど、大人になってみて、あの時進学しておけば良かったなって思うので、できたらそこでそういう援助が欲しかったです。親はいるけど親からそういう援助がもらえないっていう子のために。

義務教育を終えてすぐに働くってなっても、抵抗があると思います。自立援助ホームに入ってくる子たちを見ると、まだ遊びたいとかって言う子が多いです。視野を狭めないで広げてあげて欲しいです。

＜人生のリスタート＞

自立援助ホームに入って、家庭から離れたことで、そこから私の人生が始まっています。あの家にいたら自殺してました。何回も死にたいと思いましたから。そこで家から離してもらって、最初はすごく嫌で



したけど、離れれば離れるほど自分の身の安全が確保出来たので良かったです。

でも安全っていうことを実感できて、離れて良かったんだって思えるようになったのは、離れて３、４年くらい経って、18、19歳ぐらいになってやっとです。

＜目標は自立＞

子どもと二人で生活していくのに必要なお金を貯めて、子どもが大きくなってから施設を出て自立したいなって思っています。一人だと、どうしようっていう気持ちでいっぱいになっちゃって、そういう時に気軽に相談できる人がいて、落ち着いてって言ってくれるだけで違うので、母子生活支援施設を利用して良かったのかなって思っています。

＜支援する人たちへ。恐い思いをするのは子ども＞

学校には母親がいい顔するので、本当のことを話せない。学校も信用できないですけど、あまり学校と家庭に干渉しない人が、学校の中に一人いてくれたら良いなと思います。

スクールカウンセラーに喋って学校に伝われば、学校から親に連絡しちゃいます。情報が漏れて、一番恐い思いするのは子どもです。プライバシーを守ってくれる人がいいな。

真摯になって聞いてくれる大人は全然いないっていうのは、痛感しています。そういう人に巡り合えたら、一人の力でもどうにかやっていける。そういう人がでてきたら嬉しいなって思います。

支援機関は、みんなお金のためにと、最低限のサポートしかしてくれない。ほんとに子どものこと思ってくれてるのかこの人、とか思います。

いろいろな機関を利用した若い人たちが、施設を出た後でも気軽に集える場所として、フリースペースみたいにして作って行った時に、年齢層が同じ方がいれば行きやすいかもしれません。年齢が近い人にしか分からない問題とかもあるし、逆に大人の意見聞きたがる年頃でもあります。行きたいなと思ったら行くことができるんじゃないですかね。それまでは時間が必要ですけど。

利用し易いようにするには、何もしなくていいんじゃないですかね。下手になにかしてあげるよりも、自由に過ごすことができればいいと思います。

支援者からみたコメント

小・中学生の時にカウンセラーと教師、親の連携によって精神的に追い込まれた過去が現在でも引きずっていると思われます。ある意味で「トラウマ」のようなことかも知れません。多感な時期に大人や友人とも信頼関係が築きにくかったため、これからの生活でも心から信頼することができるのか、人間関係や困難な出来事に遭遇した際に精神的に乗り越えられるのだろうか心配ではあります。本人もまだ向き合えていないのか、施設のカウンセラーと話をしてみることができないでいます。「話したくない」と拒否されました。今はまだ無理のようです。

しかし、本人とお話させていただくと、支援者としても元気づけられることがあります。良い職場環境に恵まれ、子育てを一所懸命になって楽しんでいます。今後も職場や保育園、きょうだいなどと関わりながら生活していくにつれて、自信がついていき、どんどん信頼関係を築いていくと信じています。

10 児童養護施設・里親を経験、退所者の居場所作りに取り組む夫のＪさん（26 歳）と、母子家庭で高校中退して働いてきた妻のＫさん（26 歳）

Ｊさんは 18 歳まで里親の元で育つ。これまでに児童養護施設、児童自立支援施設、里親を経験してきた。Ｋさんは、母子家庭で育ち、母親の病気により経済的に生活が苦しかったことから高校を中退し働く。二人は、児童養護施設の子たちが卒園後も頼れる場所を作ろうと、住込みの下宿屋を始めている。

◆Ｊさんへのヒアリング◆

キーワード

◎　下宿屋でお互いに成長する喜び
◎　痛みを分かった振りをされるのが一番辛い
◎　同じ目線に立てる人。
　　地域で応援してくれるおせっかいおじさん、おばさんが大事
◎　施設を出た子に寄り添う人は必要
◎　歯車が一つになって若者を支える
◎　生きる知恵を伝えたい

自分は建築の仕事をしながら、来年、建築の学校に入学予定です。仕事が建築っていうのもあるのですが、仕事とはまた別に、下宿の修繕を自分と仲間たちで学んで実践しています。

高校は普通科高校に入学して、卒業してから働いています。18 歳まで里親さんで、社会に出た後は、里親さんの近くで生活をしていました。早いうちに両親亡くして、児童養護施設、児童自立支援施設を巡り巡って、最終的に二つ目の里親さんが良く、それで上手くいって社会にもちゃんと出られました。

＜下宿屋でお互いに成長する喜び＞

夫婦以外で下宿に住むのは一人ですが、関わっている人は 10 人くらいいます。年齢は同い年もいるし、上もいるし、大体 30 歳から下が 18 歳とほとんど歳の近い人たちと関わっています。

家の中で言うと、夫婦での生活がありながら他人が一緒に生活して

いるって特殊な環境ですが、帰ってきた時に妻（Ｋさん）が笑顔で迎えてくれて温かいご飯が待っている。それだけで俺は十分だけど、帰ってきた時にメンバーへ「最近どうだ？」って一声かけた時に、相談受けて、そこでの本人の成長と失敗、上手くいったこともあるし上手くいかなかったんだよって話を聞いていることが、一番嬉しくて楽しいです。

もう一つは、仲間、支援者というように、下宿屋を通じて、現在いろいろな人の付き合いの中で育んでいけるようになった環境で、自分だけが教えてもらうっていう一方通行だけでなくて、お互いが刺激しあえるような方が中にいるっていうのがすごく嬉しいですね。

＜痛みを分かった振りをされるのが一番辛い＞

俺が早くに親を亡くして「俺＝可哀想」だって扱いをされた時は、正直面倒くさかったです。

「大人＝信用できない」、基本的には信用できないっていう時期があって、自分はそこから抜けられたからいいんですけど、下宿で関わっている子たちを見ると、中には共感しようと思って大人がその子に言ってたとしても、本人からすれば、「なんだよ、わかってねーな」っていうことがまだ感じられる。

痛みを分かった振りをされるっていうのは当の本人からすれば、すごく嫌なんだっていうのを思います。

他に辛かったことは、３年に１回くらい転校していたので、常に学校への適応能力が求められる。小さい頃から今までで、ずっと仲良い奴がいるかっていったら、高校時代の友達くらい。その場その場で友人を作れなかったのが、子どもながらに「常に変わるって大変だな」って思っていました。

＜同じ目線に立てる人。地域で応援してくれる おせっかいおじさん、おばさんが大事＞

昔の言葉で言うと、地域で応援してくれるおせっかいおじさん、おせっかいおばさんですかね、そういう人達が大事だなって思うんです。

下宿の向かい側におばちゃんが住んでいるんですけど、自分が一人暮らしで住み始める前から付き合いはあったんですが、そこまで関わりが深いわけではなく、だからといってグイグイ「私に任せなさいよ」って引っ張るタイプでもないんですけど。信頼できるっていうのが一番

と、同じ目線に立ってくれているのが良いです。上からでもなく、下からでもなく。ちゃんと同等の立場に立って物事を考えられて、その人の立場になって上手く答え（応え）られる、対応が出来る方が必要だと思います。

　でも、それと同時に年齢は関係なく、自分が経験してきたことからの自分目線も大事だと思うんですけど、一般社会じゃないですけれども、「こういう考え方もあるよ」と提案をしてくれる人っていうのもいてくれたら良いなって思います。

＜施設を出た子に寄り添う人は必要＞

　施設を出た子どもたちに、身近に寄り添う人は絶対必要です。子どもたちが背負ってるものの理由がなんであれ、絶対吐き出さなきゃいけない、吐き出さないと子どもが辛いじゃないですか。それのクッションの役割として社会があって。大事なのは、そこで社会が連携しているっていうか、いくらチームがよくてもシステムがしっかりしていないとお互いがいい関係にはなれないんではないかなと。今の世の中だからこそ必要なのかなって思いますよね。

＜歯車が一つになって若者を支える＞

　自分がやっている下宿屋のようなところは必要だと思います。男子寮だけでなく、女子寮があったっていいし、もっと地域でネットワークができて、分け隔てなく広がって、それぞれが住むところ、働くところ、学校、それぞれがチームとしてネットワークとして役割を果たして歯車が回っていけばいいなと。その中の一つとして自分たちが社会に、貢献とは思ってないけど、歯車の一つになれればいいなと思っています。

＜生きる知恵を伝えたい＞

　これから親になるから親父としてしっかりしなきゃと思います。いい影響も悪い影響も、俺発信のものがあるから息子は本当に大丈夫かなっていうのがあって、更に下宿に関わってくれる人も生きる知恵のある子になってくれればって希望を持っています。

◆Ｋさんへのヒアリング◆

キーワード

◎　高校中退して生活費を稼いだ
◎　友だちの存在が大きかった
◎　大人は煙たい、嫌い。だけど、悪いことは悪いと言ってほしい
◎　頼りにされる喜び
◎　ご近所との付き合いが安心感
◎　人って人でしか変われない。優しくされたから優しくできる

＜高校中退して生活費を稼いだ＞

今は、妊娠中なので仕事はしていないですが、下宿の内装工事や、みんなにご飯を作ったりしています。あと、下宿の会計の仕事をしています。

家族は母親ときょうだい三人の中で、私は末っ子です。母が今まで頑張って三人育ててきたけど自分たちが高校生の時に、母親が仕事で挫折して、兄も結婚して出て行って、母と三人で暮らしていましたが、母が働いてない時期が結構長くあって、私と姉の二人で生活費を稼いでやりくりしてきたので、金銭面がきつかったです。

高校中退して、その後ずっと 16 歳からアルバイトで仕事をしてきました。この時期を乗り越えられたのは、母が三人を小さい時からずっと育ててくれたっていうのをずっと感謝しているのと、今度は自分たちが支えてあげないといけないっていう気持ちが強かったからだと思います。

高校生の時は荒れていることが多くて、先輩や同級生の子たちといっぱいふざけてました。当時付き合った男の人がグレていたのもあって、影響受けて私もスレていきました。

＜友だちの存在が大きかった＞

当時、身近に相談できる人は、大人とか、そういう支援してくれる、サポートしてくれる人達っていうよりかは、本当に一番身近にいる友達です。友達の存在は自分にとって大きかったですね。むしろ大人は嫌いでした。

＜大人は煙たい、嫌い。だけど、悪いことは悪いと言ってほしい＞

10 代の自分が大変なときに、支援者である大人たちに近寄られた

時って、私は煙たく思うかもしれません。でも私の場合は、知らない人に相談してました。何か嫌なことや悩みがあった時に一人で公園の暗いところに行って、何してるのって通りかかった人に声かけられた時に自分の鬱憤だけ晴らしたいから、一方的に話して、すっきりしたら逃げてました。知らない人だから言いやすいっていうのもありましたね。

学校では、担任とは違う先生だったんですけど、親身になって聞いてくれるっていうのは一番の条件だけど話しかけやすいオーラが大事。先生っていうんじゃなくて友達って呼べるくらいの親しみが持てる人。枠にとらわれてない先生の方が話しやすいですね。優しいだけじゃなくて、悪いことは悪いって言ってくれないと分からないです。

＜頼りにされる喜び＞

夫（Ｊさん）は児童養護施設を出た子どもたちの下宿を提供できるところを作りたい、里親になりたいっていう話をずっとしていて。私はそういうのに縁もなかったですが、下宿の準備を進めていく中で、子どもたちと触れ合っていく中で、一緒に笑ったり、いろんな面で相談にのったり、ご飯を食べたりする時間が増えていって、下宿屋を一緒にやっていきたいなって心から思うようになりました。入居している子たちが頼りにしてくれることが多いと嬉しいですね。

＜ご近所との付き合いが安心感＞

近所のおせっかいなおじさん、おばさんとの付き合いって良いなって思います。自分が地元に住んでた時も、お隣、ご近所さんとは挨拶はするんですけど、長くしゃべるってことはしなかったんで、下宿屋を通じて町内会さんだったりとか、いろんな人とお話しできると学ぶことも多いし、安心感もあるじゃないですか。

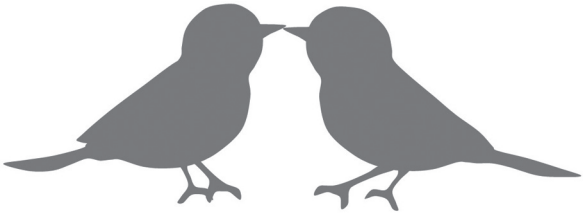
初めは、ゴミ出しとかの件で、マナーが悪かった分、お隣、ご近所さんから「いや、違うでしょ」って教えてもらったりする時期があって、ご迷惑もいっぱいかけていました。

＜人って人でしか変われない。優しくされたから優しくできる＞

これから、初めての子育ても始まって、子育てって大変っていうじゃないですか。下宿屋は、今はまだ一人しか利用はないんですけど、あと二部屋提供できる部屋があるので、入ってくる子がいたら、共同生

活できるかなっていう不安もありますが、私が今妊娠してるっていうのも周りの方々も知っているので、不安もあるけど、子どものことを楽しみにしてくれていることが多いので、いろんな人に揉まれて自分も含めてだけど、成長していけたらいいなって、希望の方が強いです。

人って人でしか変われないのかなって思っています。人に優しくされたりするから人に優しくできるっていうのをすごく感じます。自分もそうだったので、そういう人との出会いを大事に出来る場所をつくることと、自分からも一歩踏み出して外に出ること、人に関わることを、一期一会を大事にしていたら変わるのかなって。顔と顔で向き合っていきたいと思います。



支援者からみたコメント

Ｊさんも Ｋさんも、いわゆる世間が理想的と想像する、大学を卒業し正社員で勤務している社会人生活４年目の 26 歳の若者と比べた場合、現在の社会を生きる上で以下の困難さを感じます。

- これまでの生育歴に影響して、情報を理解する際の読解力の制限
- 友人的な人間関係を持っている相手がひどく制限されており、極端に閉鎖的であること
- あまりに自分の心と表現が一致しすぎていて、社会の中での他者との関わり合いに不利益をこうむっていること

こうした中で、私は二人との関わり合いの中で、次の変化を感じました。

- Ｊさんは、理想、言葉だけになっていた下宿の修繕をすることができた。長年、思い続けてきた建築関係の学校に入学することができた。相談、意見をもらいたいという話を、ある程度自発的に行えるようになった。
- Ｋさんは、紹介した友人たちやシェルターやチャイルドラインの職員との関係からある程度の安心感を持てるようになり、結婚に踏み切ることができた。下宿の仕事をＪさんとともにやっていこうと感じ、行動するようになった。

ヒアリングに同席して改めて二人の話を聞いて、支えられる人としてしまうのではなく、相手がある程度の困難を抱えているとしても、生きていくために重要な問題の解決、もしくは目標達成のために、その人たちと一緒に考え悩み、時にはぶつかり、心で触れ合って、汗を流して行動していくことが、二人の変化にとって意味のあることだったと、振り返ることができました。

２．座談会　～ヒアリングから思うこと～

ヒアリングを終えて、若者の声からどのような青年期サポートに必要な取り組みが見えてくるのか、わかもの互立（支えあい）ネットワークに参加する関係機関・団体の有志で座談会を開催しました。

（ヒアリング対象者の個人情報保護の観点から、座談会参加者の氏名は非公開としています。）

◆福祉施設関係機関・団体等の有志８名◆

自立援助ホーム職員（Ｄさん、Ｅさん）、若者サポートステーション職員（Ｂさん）、フリースペース職員（Ｃさん）、母子生活支援施設職員２名（Ｈさん、Ｉさん）、ボランティア（Ｊさん、Ｋさん）、青少年相談員（ヒアリング者）、元児童相談所職員（ヒアリング者）

＊（　）内はつながりのある「１．若者の声」のヒアリング対象者

★司会★

今回のヒアリングでは、10 組 11 名の方々の声が集まりました。

ヒアリングの言葉から拾える青年期の課題、私たちの姿勢について、それぞれ感じたところを伺えればと思います。

★自立援助ホーム職員★

本人が納得していない中で苦しい状況に追い込まれていった時に、社会や大人に対する不信感があって自ら積極的に相談する姿勢にはなりませんでした。もう少し社会のサポートが、青年期になる前の部分で直接本人に伝わるような機会があると良いと思いました。

その都度、関係機関の関わりがありましたが、年齢や課題ごとにぶつ切りとなってしまいました。困難を抱えた子ども・若者にとって、自立援助ホームのような成長と共に長い期間を関わる

ことができる社会資源があれば良いなと感じています。

家族に頼れない場合、家族以外の精神的な支えをどうつくっていくか、また伴走型支援につながるまでの丁寧なサポートが必要です。

自立援助ホームでは支えるタイミングを大事にしています。大人が本人に勝手に関わっていくと、本人は困ってないこともあります。その結果、本人の主体性が無くなってしまうことがあります。その兼ね合いの難しさもあります。

★若者サポートステーション職員★

近所のおじさん、おばさんに救われたって声もありました。子ども・若者が、専門機関と専門職とは少し緩いところの近所の方々と多様な人間関係があると良いなと思います。実際にどうやって多様な関係性を作っていけるのか、方法論までは分かりませんが必要性を感じます。

専門性については、個別支援であれば、人間関係をきちんと作れる相談をしていくことがとても重要だなと思っています。

また、学校の先生など、子ども達と出会う場面の多い方々が、困っている人に相対する時や、虐待を発見した時の基本的なルールや知識があるといいなと思うこともあります。専門機関と地域の間にある学校の役割が重要ではないでしょうか。

★フリースペース職員★

子ども・若者が社会とのつながりを実感するために、商店街でのイベントの手伝い、実用的な店先の掃除など、私たちの中で抱え込むのではなくて、地域で関わってもらうことが必要と思っています。

本人の社会参加にとって、地域の人達がひきこもりの状態を全く意識していないことが良いこともあります。ひきこもりの若者と関わり合うっていう形を、私たちが地域と共に作っていければと思います。

居場所づくりに取り組む団体としては専門性をうたわない、近所のおじちゃん、おばちゃん、お兄さん、お姉さんのような立場で地域の人達と接点を持てる形を作っていきたいです。

やはり、学校に行っている子は、学校が一番変化に気付く最初の砦

です。そこで学校で抱え込まず対応できなかったら他機関につなげていく、機関同士のお互いの信頼関係の中で仕組みが作れないかと思っています。

★自立援助ホーム職員★

お二人の意見から、地域の中で本人は生活をしているということ、その部分での支え、人とのつながりの部分の大切さというところを振り返ることができます。

ホームでは、就職したら終わりではなく、その後もずっと関わり続けてきました。本人の人生で、どこが一番つながり続けるところなのか探していくことが必要だろうなと思います。

★母子生活支援施設職員★

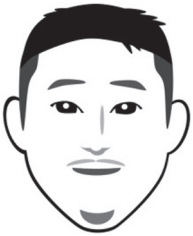
専門性について感じていることがあります。

青年期ってなんだろうって考えると、大人の部分と子どもの部分とすごくない交ぜになっているような状況かと思います。それをどういう風にサポートするかというと、色んな体験を一緒に共有していくところがまず第一歩なのかなという風に思いました。この人信頼できる、尊敬できるんじゃないかなっていう方を見つけられたなという時期かなと思いますし、その頃に、嫌な大人に出会うということも多少あるとは思います。そういうことを色々経験しながら、私たちも何か体験を元に関わっていくというのが大事になってくるのかなと思いました。

本人から「大人が支援のことを仕事だからやってるんでしょ」とか「お金のためでしょ」と言われることもありますが、それも事実ではあります。でもそれを感じさせないようにやるのが専門性ではないかと思います。ただ、本人のやっていることに一緒に関わって、本人と関係性を築いていくことが大事ではないでしょうか。

どこかの社会資源を利用しようとする時に、本人なりの今までの経験から「どうせあそこに相談したって冷たい対応される」と聞かれます。そうした気持ちがあると本人が次に相談することはハードルが高いのです。「どこに相談していいかわからなかった」「社会資源を聞いたことあるが行ってもどうせ同じ」という不安に対して、つながるまでの丁寧なアプローチというのは非常に大事だと思っています。

★母子生活支援施設職員★



母子生活支援施設では、本人の生育歴を聞き取り、母親として、人としての育て直しから始まることがあります。私たちが本人の過去を聞き出すことには覚悟がいるし、興味本位に聞くというのはしてはいけないと思っています。しっかりと目的を持って聞き取っていきながらそれをどうサポートにつなげていくかということを職員で共有しながら取り組んでいます。入所施設なので本人と喜怒哀楽を共有できることが強みです。困り感に寄り添うだけでなく、相手に寄り添うこと、共有することも大事だと感じています。生活の中で相談ごとではない本人の感情を受け止めるような私たちの姿勢が大事です。

★ボランティア★

ボランティアとして福祉施設や矯正施設とつながった若者と関わってきました。その中で、一人ひとりの状況を見ていくことを大切にしています。ヒアリングでは「痛みを分かった振りをされるのが一番辛い」「相談室があるから改めて来てねってすごい上から目線」という声がありました。大人が信用できないし、社会も信用できないけど、悩みを分かってほしいという気持ちを持ち続けていることに気づかされました。

★司会★

社会資源につながるまでの伴走的な視点を持つこと、体験を共有して関係性を築いていくこと、学校と関係機関の連携、地域の中で多様な人間関係を作っていくことなどが話題にあがりました。他にいかがでしょうか。

★フリースペース職員★

家族全体で問題を抱えている時に、家族全体をサポートできる制度が十分に無いように感じています。

私たちの団体は元々親の会が原点です。しかし、法人化して団体が出来た途端に親の関わりがすごく薄くなり親の会は休止しています。それでも子ども達の課題は変わってないから、親御さんたちに当事者

意識を持ってもらわないといけないのですが難しいところで、家族への関わり方を色々と考えてみたいと思っています。

★自立援助ホーム職員★

いつの間にか制度の枠組みの中で、本人に対するサポートをしてきた反省があります。元々制度の無い中で、無いものは作っていくといくことで始まったのが自立援助ホームでした。

制度の部分では、特に 15 歳以上から乏しくなり、18 歳以降はほとんどサポートの無い中で喘いで暮らしている本人たちがいるという現状から、社会資源を増やしていければいいなと思っています。

★青少年相談員★

ヒアリングをして、改めて若者たちは大人が上から目線っていう風に捉えていて、相談をすることは、すごく嫌なことで自分が惨めになるような感じなんだろうなと思いました。胸の内をヒアリングだから話をしてくれたんだろうと思っています。今も苦しんでいる子ども達がいるかもしれない、だから、その子たちのためにも話してくれたというところがありました。

また、高校に行きたかったけど、やっぱり働かざるを得なかった、制度的に高校には行けなかったことが共通していました。

心に残ったことは、一番困っていた時期が小学生だったということ。親と別なところでちゃんと話を聞いてもらえれば本音を語ることができたと言っていました。その小さい時の支援を充実させるにはどうしたらいいんだろうって思います。

学校の先生が一番関わっていますが、学校にも限界があります。学校側を支援して、心配な子を見つけたら、つなげて行けるような仕組みが必要です。

話をしてくれた方達が希望を持って生きていけるのは、支援につながったラッキーさっていうのを思いました。専門機関につながって、そこで信頼できる大人に巡り会うっていう出会い、ここがものすごく大きなことだったんだろうなと思います。私たちがいかにそういう大人になれるか問われている感じがしました。見つけることができなかった子達もいるので、低年齢の時にサポートする体制を作れないと、困難を抱えた若者が増えていくばっかりだろうなと感じました。

★元児童相談所職員★

ヒアリングから伺える困難さは、男性と女性、障がいがあるか、ないかでも異なる部分があり、多様なニーズがあることに気づかされます。男性はどちらかと言うと「今はなんとかやれてます、生きてきました」という声が聞かれます。でも、実は辛いところもあったり、寂しいところもあるんだろうなということを感じました。

専門職であっても、地域の人達にしてみても、おせっかい、という姿勢でいることが大事なのかなと思います。社会の周りにいる色々な人達と一緒に生きているんだよ、気になったからちょっと話を聞こうかなと思うようなことがあれば関わっていく、そんなスタンスを持っていきたいです。

残念ながら制度の中では、年齢で横に区切られて、種別でも別れています。家庭にいくつかの困難性や複雑さを抱えている家族をどう支えるかということも含めたサポート体制の方向に少しずつ向かっていきそうになってるのかなと感じているところです。

青年期という所にスポットを当てると、現在対象としている人達をどう支えていくか。このヒアリングの背景には、関係機関同士でお互いのことを知るという事も大事だけれども、更に当事者はどう思ってるのかというところに疑問をもったので、当事者の声を聴いて、それをまた私たちにフィードバックして私たちの仕事なり、関わり方に活かしていくことがねらいでした。

もちろん公的な仕組みの中で支えていくっていう必要性はありますが、地域社会の中で連携していく、ネットワークを組む、支えあいのコミュニティを作っていく、そういう動きをしていかなれけば、取り残されてしまうという人が出てくると感じています。

★司会★

私たちが若者の声から何を受け取るべきなのか、皆さんから改めて気づいた視点が多く出てきたように思います。座談会の内容も踏まえながら、このヒアリングからの提案をまとめたいと思います。ありがとうございました。

3．サポートブックからの提案

平成 25 年度に発行した「青年期サポートブック」（以下、「Vol.1」）では、青年期サポートに関する関係機関・団体の実践事例を中心に取り上げました。互立ネットでは、それぞれの事例を基に青年期サポートの今後の具体的な方策について考える中で、「見守りボランティアの養成」「職親さんの拡充」「ケア付き下宿の設置」「学びの保障」の４点に整理しました。しかし Vol.1 では、実践事例が基となっており、当事者の声からまとめることの難しさが課題として残りました。

今回の提案は、これまでの方策と合わせて、当事者ヒアリングから聞こえてくるものを加える形で次のとおり整理を試みました。どの方策も既存の制度・施策の中での対応だけでなく、福祉・教育・就労等の分野を横断・連携した仕組みづくりが必要となっています。

キーワード

◎　ファミリーソーシャルワーカー（専門職）の拡充と見守りボランティアの養成
◎　個々に応じた社会参加・就労サポート、職親さんの拡充
◎　青年期自立援助ホーム（ケア付き下宿）の設置
◎　学びの保障
◎　早期の対応と、より組織的な取り組みの充実

（1）ファミリーソーシャルワーカーの拡充と見守りボランティアの養成

「（不登校やひきこもりの状態を）親の困っている課題と本人の困っている課題は別物」「本人としては自分も大変なのに自分のせいで家族まで困っているのはすごく負担が大きい」「（不登校の状態では）親が動いてくれないと自分から動けない状態」などの声がありました。本人の抱える課題は、家族が抱える課題も少なからず影響しており、家族全体へのサポートが必要であることが分かりました。

本人が 18 歳を超えても家族全体をサポートし、専門機関との連携やネットワークを作る役割を担う専門職（ファミリーソーシャルワーカー）の養成・配置が必要です。子ども・若者育成支援推進法に基づく「子ども・若者支援地域協議会」のコーディネーターとしても期

待されます。養成には、児童福祉機関・施設における既存のファミリーソーシャルワーカーのノウハウが有効です。

「子どもが背負っているものの理由は何であれ、吐き出さないと辛い。そのクッションの役割として寄り添う人は必要」「（専門家ではない）普通の人に認められたことが自分の気持ちの変化として大きかった」「（虐待に）誰かが気づいてくれて助けてくれていたら、（私の）心の問題は変わってきた」といった声がありました。限られた専門職では担いきれない身近な立場での寄り添いと必要なサポートにつなぐ役割の見守りボランティアの養成も考えてみてはどうでしょうか。【コラム参照】

（2）個々に応じた社会参加・就労サポート、職親さんの拡充

「個別のカリキュラムと、何でも気軽に相談できる場所の両方があったら良かった」という声がありました。さまざまな困難さによって就労が難しい方たちにとって、個々に応じた社会体験の機会作りや就労につながるためのサポートが広がることが期待されます。

また、Vol.1で紹介した矯正施設を出た人たちに対する「職親（しょくしん）プロジェクト」が広がっています。若者の抱えた個別の困難さに対する配慮や理解を事業者に広げていくことも必要となっています。

（3）青年期自立援助ホーム（ケア付き下宿）の設置

「ある程度の常識と、社会に出ても生活できるような知識・経験を持たせてくれるところが欲しい」「親から離れている子にとって心の存在になってくれるような人が必要」「生活に切羽詰った時に面倒を見てくれる長期的な自立援助ホームのような場所が必要」「親を頼らずに高校に行きたい人が行くことができる場所があれば良かった」などの声がありました。

現行の自立援助ホームでは基本的に就労が目的であることや、利用が 20 歳に至るまでとなります。それでも自立の難しい方には自立援助ホームが自前で近隣に住まいを用意し、サポートしているのが現状です。20 歳を超えて、就労自立以外の目的にも利用できる青年期自立援助ホーム（ケア付き下宿）の設置が必要です。

（4）学びの保障

「高校ぐらいは出たかった」「高校に通える子がうらやましかった」「必要な学歴をつけて社会に出すべき」という声からは、虐待等により

十分な学習の時間と場を家庭に作ることができなかった方々が、高校進学をあきらめざるを得なかった状況が見えてきました。家庭環境に左右されず、社会に巣立っていって力を発揮できるための教育環境の充実が求められています。

進学できたとしても中退しないための方策も必要で、例えば県内に広がる高校内カフェと言われるような緩やかな相談・居場所が提供される仕組みづくりや、学校の教育相談コーディネーター等が福祉に関する専門的知識のさらなる習得も期待されています。学校における多機関・団体との日常的な連携の方策も大事となっています。

また、児童養護施設等の社会的養護にいる子どもが大学等への進学を選択できる保障も重要です。

（5）早期の対応と、より組織的な取り組みの充実

「児童相談所やスクールカウンセラーに相談している姿を友達に知られたくない。偏見の目を向けられたくない」「お弁当が無くて、担任に心配されて、親に連絡されて、親から叩かれた。それからは隠すようになった」「大人に対する不信感を持っていると、相談機関も疑いからしか入らない。絶対に行かない」という声からは、大人に対する不信感を持ち、幼少期から本音を隠し続けてきたことが分かりました。学校や福祉機関でのアウトリーチの仕組みづくり、市町村での子育て相談支援の向上など、相談支援の充実に向けた適切な人員配置・育成が求められます。地域における関係機関同士の連携・ネットワーク化、虐待等に至る前の予防的な関わりの充実に向けた市町村の要保護児童対策地域協議会の活性化、子ども・若者支援地域協議会の設置・活性化が望まれます。

また、「（虐待から）一番助けて欲しかったのは、小学校低学年だったけど誰も助けてくれなかった」「私を大人（支援）の枠に当てはめようとしていることが嫌だった」という声も聞かれ、若者たちは相談したとしても、気持ちを受け入れてもらえなかったことや、気づいてもらえなかった経験を持ったことで、辛い気持ちを抱え続けていました。私たちには、「気づく」感性を育むこと、「気持ちを聴く」「寄り添う」など基本となる姿勢や関わり方についての理解を深めていくことが必要となっています。

ヒアリングからは、本人が抱える気持ちを、成長の中で受け入れられてきた経験を持てていたか、自分で乗り越える力を蓄える時間や精

神的余裕、支えてくれる大人がいたかどうかが大事であったことがうかがい知れます。「（支援者とつながり）人生のリスタートを切ることができた」―。私たちは子ども・若者が歩んでいる人生の節目に関わっているからこそ、本人が着地点を決めることができるように伴走する視点を改めて持つ必要があるのではないでしょうか。

コラム ― ボランティア養成への試み ―

互立ネットでは、専門機関と当事者である子ども・若者の限られた関係から、ボランティア（住民）が関わり合うことで、新たな関係が生まれ、本人のより幅の広い社会参加の動きとなって地域へと拡がっていくことが大切であると考えた。

子ども・若者が経験した虐待やひきこもりから生じる生活課題を理解したボランティア養成について、互立ネット、児童養護施設等退所者支援事業所（あすなろサポートステーション（ＡＳＳ））、県社協の３者が協働して、平成 27 年度より試行的に開始した。

（実施方法）

○互立ネットとつながりのある方に参加を呼びかけ、10 人程度の少人数で、懇談会形式で実施。若者に寄り添う姿勢についてお互いに学んでいくことを大切にした。平成 27 年 10 月より月１回の頻度で開催。

○養成講座の終了後、ＡＳＳで実施される若者たちとの夕食会に協力した。

（養成講座の一場面）

○不登校・ひきこもりの子ども・若者の居場所作りの団体から講義。「自分で考える時間が保障されている」「受け止めてくれる場所・時間があること」「その場に集う子どもたちで作られること。大人はその空間作りを支えているだけに過ぎない」ことがポイントとして伝えられた。

（本ボランティア養成講座は、リコー社会貢献クラブ Free Will の助成により実施）

4．特 別 寄 稿

子ども・若者と共に生きる

―互立ネットの可能性―

加藤　彰彦（沖縄大学名誉教授）

この『かながわ青年期サポートブック』（Vol.2）には、19 歳から 35 歳までの男女 11 名の率直な思いと、心の底から湧きあがってくるような叫びが満ち満ちている。

「わかもの互立（支えあい）ネットワーク」が結成されたのが平成 24 年。

現在の厳しい社会状況の中で生き抜いていくためには一人だけの努力では難しく、思いを同じくする人々によって互いに支えあっていくことが必要であるという思いから、このサポートブックが発行されたと伺っている。

そして青年期の子ども・若者を支えるためには、まずその若者の声を聴こうということで、直接、生の声を聴きとる作業が開始され、今回のメッセージ集となった。

いつの時代も、子どもたちは生まれた時から安心して養育される家庭に恵まれ、学童期になってからはジックリと学び、友人たちと共に成長していく学校生活が保障されてきた。

しかし、近年の家庭環境、学校状況は、そうした成長を支えるものではなくなってきており、貧困と格差の中で苦しんでいる若者たちが多くなっている。

「毎晩毎晩、口論がくり返され、父親が母や兄に暴力をふるう」という日常の中で、そのストレスから母も兄も、その下の子どもを殴るような日常生活が展開されている。

また「両親と妹の 4 人で暮らしています。家にいることが嫌です。お金もないですし、家にいづらいです。」と語る若者もいる。

その結果、親に愛されていないと感じ、クラスの仲間や先生の視線に耐えられずに不登校になる子どももいる。

こうした状況になった時、子どもたちは身近な誰かに助けを求めたり、つらい思いを話すことができたはずである。

しかし、現代の子どもたちの多くは、このつらさを教師や相談員に話さないというのだ。

もし相談すれば、そのことがすぐに親に伝わってしまい、そのためにもっと激しい暴力を受けることを子どもたちは知っている。

その恐怖のために、子どもたちは自らの悩みや苦しみを一切口外しないという。

「本当に私には居場所がなくて、自分が存在しなかったような感じです。」と、その若者は語っている。

こうした幼少期からの環境が続く中で、子どもたちは青年期を迎え、社会へ出ること、人と関わることに恐怖心を持ってしまうようになってしまった。

「一番助けが欲しかったのは小学校低学年の頃。小学生だと自分自身で逃げきれない。」と別の若者は語っている。

その結果「親も大人も、外にはいい顔をするじゃないですか。」と確信する。

そして「大人は信じられない、頼ろうとは思わなかった。」という重い言葉が続いていく。

子ども・若者たちに関わり支援しようとしている私たちは、彼らの中にこのような深いあきらめと拒絶があることを知らない。

しかし子どもたち、若者たちはもう一方で声をかけ、親身になって支えてくれる人を求めてもいるのだ。

「友人みたいな大人がほしい。何でも話せるし、何でも聴いてくれるっていう友だちみたいな感覚で付き合えるような、そういう大人がほしかった。」

大人の論理や、現実の枠組みの中だけで考えるのではなく、既成の枠を外して話を聴いてくれる人を子どもたちは求めていたと思う。

しかし、こうした大人たちには中々会えなかった。半ばあきらめ、絶望している中で、やがて彼らは寄り添ってくれる大人たちに出会うことになる。

特に中学を卒業して高校へ進学するという道が選べなかった若者たちにとって「自立援助ホーム」の存在は実に大きかったということがよく分かる。

「一番大事な時に、一番力になってもらっています。親と同じように

関わってくれる、関わりの深い人たちです。」

「自立援助ホームは、退所した今でもまだこうやって関わりがあります。会いたいなって思う時もあります。」

自立援助ホームには何があるのだろうか。

現在の高校進学率は 90%を越えている。

しかし、家庭の事情で中学を卒業した後に、高校への進学をあきらめ、自活し就職していく道を選択しなけれならない若者には、他の仲間とは違った悲しみがある。

そうした若者たちに寄り添い、話を聴き、それまでの人生を受け止めてくれ、一緒に次への人生を考えてくれる大人の存在は、彼らにとっては、今までにない新たな大人との出会いとなったはずである。

しかも、それからの自立援助ホームでの生活は長い。ホームを出てからも関係は続いていく。

そんな彼らを、支援員はインタビューした後に、こう述べている。

「客観的に見たらいろいろあったんだと思うんです。でも行動力を持っているので、本当に困ってもどうにかやってきた。とりあえず何とか生きていくみたいな生命力を持っているんです。」

必死に生き抜いてきた彼らを「すごい」と認め、その「行動力、生命力」を評価している。

若者たちにとって、自分の存在を認めてくれた大事な存在になったという気がする。

そして、出会った支援員に対して、若者たちはこう言うのだ。

「人って人でしか変わらないじゃないですか。人に優しくされたりするから人に優しくできるんです。」

「自分たちは教えてもらうっていう一方通行だけじゃなくて、お互いが刺激し合える方が中にいるっていうのがすごく嬉しいですね。」

青年期の若者にとっては、共に寄り添う人と一緒に力を合わせ、一つひとつを乗り越えているという実感がある。

また支援員にとっても、もう一人の自分を支えているという実感があり、共に支えあっていると感じているはずである。

人生を共に過ごし、次のステージへと登っていく手応えがあるのだと思う。

そして、子どもたち、若者たちは自分たちを特別扱いするのではなく、普通の人間、一人ひとりの若者として見てほしいと思っている。

だからこそ「普通の人に認められたかったというのが自分の中で大

きいし、自分も評価できるなっていう風に思えました。」と話す。

フリースペースを利用後にNPO法人の職員として働くことになった若者が、そこでは商店街の人々と関わることが多く、普通の付き合いができるという。

「その人たちは私の経歴を全く知らない。そのことがすごくありがたいのです。」

いづれにしても、今回のサポートブックからは若者たちの本音が吐露され、それを受け止めることによって、共に歩いていくことができるかが問われているように思われる。

最後に「サポートブックからの提案」があり、ここには重要な指摘がある。

一つは、ファミリーソーシャルワーカーの拡充とパーソナルサポーターの養成である。

県としても本格的に子ども・若者に寄り添い、地域で支援していくコーディネーターを養成し、設置していくことが求められていると思う。また「青年期自立援助ホーム（ケア付き下宿）」の設置も、早急な対策だと思う。

ＪさんＫさんが始めた「下宿屋」も重要な居場所である。

支援を受けて立ち直った若者が、支援する側になっていくという構造は、支えあいの基本だという気がする。

そして市町村に、こうした居場所づくりと共に要保護児童対策地域協議会、子ども・若者支援地域協議会が着実に生まれ、地域に定着した活動ができるようになると、地域全体がお互いを支えあう互立ネットワークに育っていくと思う。そのためにもこのサポートブックが活用されることを期待している。

加藤彰彦氏プロフィール

1941年生まれ。小学校教員、横浜市寿生活館相談員、児童相談所ケースワーカーを経て、1991年より横浜市立大学教授、沖縄大学教授・学長を歴任、2014年より沖縄大学名誉教授。

ペンネーム「野本三吉」で著書多数。直近では『生きること、それがぼくの仕事～沖縄・暮らしノート』（2015年　社会評論社）、『希望をつくる島・沖縄―キミたちに伝えたいこと』（2015年　新宿書房）、『子どもとつくる地域づくり―暮らしの中の子ども学』（2014年　学苑社）など

おわりに

―― 謝　辞 ――

かながわ青年期サポートブック Vol.2 の発行に際して一言ご挨拶申し上げます。

私たち「わかもの互立（支え合い）ネットワーク」結成時より代表を担っていただいた、関東学院大学准教授鈴木力先生からは、我々の取り組みについて常々、「支援機関や支援者のみの議論で進めてはならない。」「困難を抱える子ども、若者の生の声を聴くことが大事である。」とのご指導をいただいてきました。そこで、平成 26 年度に直接若者の声を聞くヒアリングに取り組みはじめましたが、直後の平成 26 年 9 月 8 日、鈴木先生は突然ご逝去されました。我々はこれを鈴木先生のご遺志としてヒアリングを継続し、聞き取り内容のデータ化を進め、さらに平成 27 年度の活動として、これに加筆等を行いながら冊子化に取り組んできました。

ヒアリングには 10 組 11 名の若者に参加をいただきましたが、あまり思い出したくないことや言いたくないであろうことをも語ってくださり、また、サポートに携わる者への貴重な示唆をくださったことは本書をご覧のとおりです。短い時間、知らない相手に彼らがすべて語れた訳ではないでしょう。私たちがすべてを受け止めることができたわけでもありません。それでも私たちにとって、気づいていなかったり、認識を新たにすることがたくさんありました。

この冊子では、紙面の都合があってヒアリングの中の大事な点を中心に掲載することになりましたが、困難を抱える子ども・若者の支援を担う者みなに、改めて若者に寄り添いともに歩む者みなにこの書をご覧いただき、少しでもお役立ていただければ幸いと考えております。

私たち互立ネットのメンバーも本書の「サポートブックからの提案」に述べさせていただいたテーマについて、今後も一歩ずつ進んで行く所存です。

改めてヒアリングに協力をいただいた若者とそれぞれの支援者・支援機関、神奈川県社会福祉協議会の皆さまに厚く御礼申し上げます。

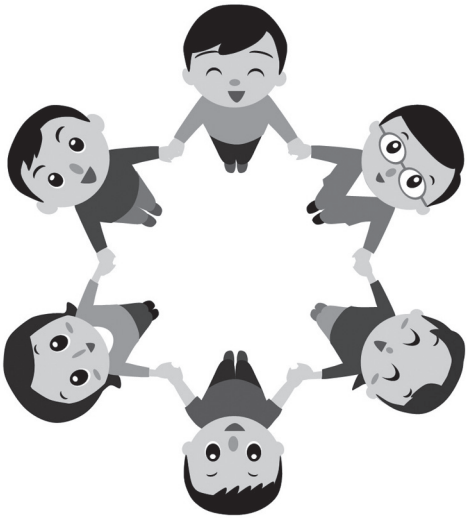
また、特別にご寄稿をいただきました、沖縄大学名誉教授加藤彰彦先生、この冊子の作成や互立ネットの活動に多大なご協賛をいただきました「株式会社リコー　リコー社会貢献クラブ・FreeWill」様、私た

ちの取り組みにご理解をいただき印刷・製本に際して様々なご配慮をいただきました「NPO 法人共働あるむ」堀場様、藤田様にはここにご紹介方厚く御礼申し上げます。

末尾になりますが、ここに鈴木力先生のお言葉をご紹介させていただいて、まとめとさせていただきます。

「この仕事は学ぶことに始まり学ぶことに終わる。
人生は人との関わりに始まり人との関わりに終わる。」

わかもの互立（支え合い）ネットワーク代表
寺田　勝昭



参考資料　若者へのヒアリング企画書

1．ねらい

○若者の声を関係機関・団体、社会に発信し、青年期における困難さへの理解と、社会において若者の育ちを支える取り組みの広がりを図る。

○当事者の視点、当事者が捉えている物事の意味に着目するため、若者の抱えている気持ち、今後の生活に対する希望や不安についての「生の声」を集める。

2．対象

わかもの互立ネットワークの参加者である機関・団体とつながる若者とする。（18 歳以上の方を対象）

3．実施方法とヒアリング対象者

（１）実施体制

ヒアリング対象者１名：支援機関１名：ヒアリング者１名：記録者１名の４名にて実施する。ヒアリング時間は１時間程度を想定する。

＊ヒアリング者は、神奈川県社協「青年期サポートのあり方検討会議」メンバー（わかもの互立ネットワーク運営委員兼務）が分担して行う。記録者として、県社協が同席。

（2）半構造化ヒアリング

できるだけ本人が使用する生の声を得るため、質問項目に順序立てて聞くのではなく、話し手との自然な流れを大切にし、柔軟に順番を変えたりしながらヒアリングを行う。

（3）実施期間

平成 26 年７月～平成 27 年１月

4．ヒアリングの内容

（1）現在のあなたの生活について（住まい、仕事、余暇、人との関わり）教えてください。

（2）いま暮らしていて、嬉しい出来事についてエピソードを教えてください。

（3）いま暮らしていて、困っていることや苦労していることについてエピソードを教えてください。

（4）不安なことがあったり、困ったことがあったときには誰に相談しま

すか。

（5）困ったときに相談相手になれる「サポーター」が身近にいるとします。
○あなただったら、どんなサポーターだったら相談したいと思いますか。
○あなただったら、サポーターにどのようなことをお願いしたいですか。
○どんな居場所があると来てみたいと思えますか。

（6）暮らしについてどんなサポートが社会にあると若者にとって良いと思いますか。

（7）将来どんな人になりたいと思いますか。また、今後どんな暮らしを望んでいますか。

（8）社会に対してどんな不安や希望を感じていますか。